召されて兵士となる

「兵士の誓約」を探求する

救世軍軍令及び軍律　兵士の巻

救世軍万国本営発行

救世軍大将によって
救世軍万国本営発行 ©2020 年

本書で引用している聖書の言葉及び聖書箇所は、日本聖書協会『新共同訳』を使用しています。(認可済)　なお、聖書引照では、聖書各書の略語を用いました。

目　次

まえがき　　大将 ブライアン・ペドル

はじめに 1

第 1 章 5
私は、イエス・キリストを私の救い主、また主として受け入れた者であり…

第 2 章 15
私は、救世軍教理 11 か条のうちに示されている神の言葉の真理を信じ…

第 3 章 21
私は、日ごとの歩みにおいて聖霊の働きと導きに従い…

第 4 章 29
私は、…神の国の価値観に従って生きることを約束いたします。

第 5 章 37
私は、どのような場所でも、…クリスチャンとしての高い水準をあかしし…

第 6 章 47
私は、…すべての人たちとの関係の中で、クリスチャンの高い理想を維持することを約束いたします。

第 7 章 55
私は、結婚と家庭生活との神聖さを保ちつづけることを約束いたします。

第 8 章 61
私は、…忠実な管理者となることを約束いたします。

第 9 章 71
私は、…体や霊性をそこなうすべてのものから遠ざかることを約束いたします。

第 10 章 77
私は、神が救世軍をおこした目的に忠実であること…を約束いたします。

第 11 章 85
私は、小隊での礼拝や活動に積極的に参加すること…を約束いたします。

第 12 章 93
私は、救世軍の主義と活動とに真実を尽くし…

召されて兵士となる

「兵士の誓約」を探求する

まえがき

この度新しく出版された、大変重要な書籍『召されて兵士となる』のまえがきを、救世軍大将として書くことは、私にとっての特権です。この書籍は、積極的、また従順な信仰を、私たち個人個人がもつことが求められていることを思うとき、実に時宜（じぎ）にかなった出版です。私たちの住む世界において、お互いの関連性がより緊密になってきていることを実感します。私たちが個人的に、社会的に、また国家的にどのように関わりをもつかは、私たちの社会や環境にとって重要な意味をもっています。私は、この書籍が、これらの事柄について考える上で、大変有用であると確信します。

「召命（召し）」ということについて考えてみましょう。私たちクリスチャンは、私たちの信じる神が、使命の神であると確信します。その使命は、イエス・キリストの生涯と死と復活の中に最も完全に、また明確に示されています。神は、キリストの霊を通して、その使命を私たちの住む世界に果たし続けておられます。とは言え、神は、その使命を果たすために、私たちをその協働者として招いておられるのです。イエスは、一人ひとりを、ご自分に従うようにと招かれました。そして、そのことを通して、この世界に変革をもたらされました。この同じ招きが私たち個人個人に与えられるとき、それは、自分だけの問題ではなくなります。

神は、私たちを、それまでとは異なった社会へと召し出し、そこに変化を起こさせるように求めます。救世軍人たちにとっては、この召しは、救世軍という共同体の中において見いだされます。私たちの使命は、救いのクリスチャン的理解によって、形成されると確信します。それゆえに、私たちは、救いの軍隊であるの

です。私たちは、どこにあっても、神の癒しの愛と、神が受け入れてくださる恵みをもたらすために存在する軍隊であり、神の正義をこの世に実現するために存在する軍隊なのです。私たちはまた、聖い生活を送るように召されています。そのために、聖書的召しを理解し、私たちの教理を通して、救世軍がどこに目標を置いているかを個人的にも、共同体としても、具体的な生き方として理解するのです。これらすべてが救いの表れです。私たちはこのことを、聖霊の力により、一つになって実行するのです。救世軍においてこの召しを受け入れる者が兵士となることを選択し、小隊がそれをサポートするのです。

私たちが、クリスチャンとして生きることは戦いであると考えることは、21 世紀に生きる私たちにとって時宜にかなったことでしょう。それぞれの国には、挑戦すべき悪と、対応しなければならない課題があるでしょう。どのクリスチャンも、これに個人的に関わることができるでしょうが、救世軍兵士であることは、これらの戦いに、共同で対抗していく道が備えられるということなのです。このようにして、ある一つの地域が災害に遭遇するとき、私たちは同じ救世軍人として、その国を支援するでしょう。ある個人が、またある家族が何らかの依存症に苦しんでいるならば、私たちは、一つになって希望を回復させるのです。もし、国や民族間に争いが生じ、分断が起こるならば、私たちは、和解をもたらす神の愛を実践するでしょう。救世軍兵士となることは、正義、癒し、希望をもたらす行為に、意識的に自らを献げる道なのです。兵士であることは、私たちが救いの軍隊として共に働くことへの招きなのです。

私たちの救世軍人としての行動は、重要な確信の上に打ち立てられています。私たちが何をするかは、私たちが何を信じるかによって決定づけられます。ですから、本書は、救世軍人の信仰がどのようにその行動を形づくるかについて理解する助けとなります。この本はまた、礼拝の重要性について述べています。なぜなら、私たちが礼拝する神は、救いの使命を帯びた神であるからです。私の祈りは、皆さんがこの本を読み、その内容を学び、その結果、救世軍の兵士であることが、限りない重要な召しにあずかっているということをより深く確信するに至ってほしいのです。この本を読み、問いかけをし、私たちを神の働き、神の使命へと召しておられる神に、心を開いてください。

大将　ブライアン・ペドル
2021 年 2 月

召されて兵士となる

「兵士の誓約」を探求する

はじめに

救世軍人として私たちは、イエスが一人ひとりの人を、弟子として生き、イエスご自身に従うよう召しておられると確信しています。救世軍兵士となるとき、私たちは心から喜んでこの召しに応答し、そしてキリストへの継続的な従順をもって生きるという決心を宣言するのです。

救世軍の兵士であることは、それを通して、私たちがイエスを救い主、また主と告白し、弟子として生きることを実現する枠組みとなります。それは「…すでに起こった、命（生活）を変えてしまう、キリストとの出会いに対する、公の応答であり、証言です[※1]。」兵士であることは、個人的な成長のための指針、チャレンジ、様々な規律そして機会を提供するものです。兵士になることは、信仰の旅路のひとつの段階を示します。それは継続して弟子として生きるという献身であり、自分自身の行動とライフスタイルについてのより深い理解と定期的な点検、そして人生のあらゆる面において、よりキリストに似た者となっていくというチャレンジを受け入れることです。

兵士であることはまた、人を造りかえる福音の恵みを他の人々と分かち合うように、という神の召しに応えていこうという、意識的な選択です。兵士になることを選ぶとき、私たちは、救世軍において、また救世軍を通して、活動的なクリ

※1　『救世軍教理ハンドブック』付録 4. 万国霊的生活委員会報告、宣言 5、305 頁

スチャンの奉仕に身を献げるという決心をするのです。そしてこの世界における、この世界に向かう、この世界のための神の使命に参画するという意思を表明するのです。兵士であるということは、私たちに使命のための装備を整えさせ、そしてそのための枠組みをも与えます。

どんな軍隊でも、良い働きのためにはその目的に専念し、使命に忠実である兵士が必要です。救世軍のミッションステートメント（使命を簡潔にまとめた宣言）はその目的を以下のように要約しています：

> 万国的ムーブメントである救世軍は、公同のキリスト教会における福音主義を代表する一派である。
>
> その**メッセージ**は、聖書の基盤に立ち、
> その**働き**（ミニストリー）は、神の愛に動機づけられ、
> その**使命**は、イエス・キリストの福音を宣べ伝え、主イエス・キリストのみ名において、分けへだてなくすべての人々のニーズに応えることである。

救世軍の兵士になるようにとの神の召しを受け入れることは、この使命への献身の表れです。自らのクリスチャンの信仰を宣言し、分かち合い、生きる道です。「救世軍兵士の誓約」（以下、「兵士の誓約」と略）は、救世軍の信条と価値を表し、救世軍兵士として生きる枠組みを示します。それは信仰の宣言であり、神が私たちを造りかえ、新しくし続けることを認める約束であり、命の道への献身です。それはまた、私たちの一致と、軍隊としてのアイデンティティーのしるしでもあります。すべての救世軍兵士はこの誓約をするからです。私たちが兵士となるようにとの神の召しに応答するとき、私たちは、この誓約によって形づくられた世界的なユニークなつながりの一部となるのです。この誓約はキリストに対してのもの、私たち自身の聖潔の成長についてのもの、そして救世軍の使命に実際的に参加するということについての誓約です。

この本では「兵士の誓約」を学んでいきます。各章では、誓約を形づくっている一つの約束の言葉に焦点をあてます。そして救世軍兵士として生きる中で起こりうることや、与えられる機会をはっきりとさせていきます。「兵士の誓約」は、救世軍人の神学と実践という文脈の中にあります。それは、私たちが神に対してなす約束はまた、軍隊を指揮するための規則一式でもある、ということです。

救世軍兵士になりたいと願う人はだれでも、この誓約について祈り深く考える必要があります。「兵士の誓約」の中で強調されている信条や価値、行動は、神と神の働きへの献身、心と生活の聖潔、個人的な高潔さと真正さ、キリストに従う者、という言葉が示すにふさわしい姿で生きようという決意を求めるものです。救世軍兵士になるということは、私たちの人生への神の特別な召しと選びに対する、公の証しです。

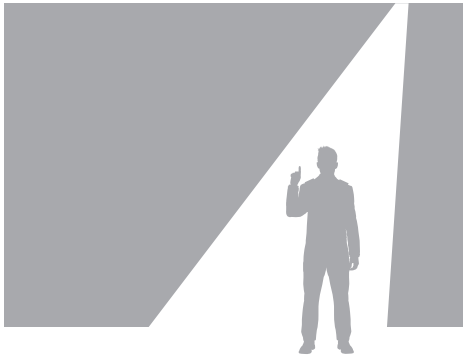
救世軍兵士として生きることは、私たちの毎日の生活に、自分のなした誓約を実行に移そうと努めることであり、それは神の恵みと導きに頼ることによってのみ可能となります。兵士であることは、聖霊の造りかえる力の証人となるための機会であると言えます。また、本当の自由を示す機会でもあります。それは、私たちが神と救世軍とお互いに対する責任をもつ、訓練された弟子となったときに可能となります。

この本は兵士になることを考えている人たちに、その基礎となるものを示します。また、すでに兵士となっている人たちが、兵士献身サンデーのような年に一度の特別な機会や、スモールグループで、また個人的な学びのときに、自分のなした誓約を見直し、自分の人生が、自分のした約束を実践しているかを改めて確認するための資源にもなるでしょう。各章の最後にある質問は、これらのプロセスを助けるために設けられています。兵士たちは、兵士としての旅路が深まっていくにつれて、自分自身がそれぞれの問いに対して新たな答えをもつようになること、また様々な仕方でチャレンジを受けることに気づいていくでしょう。

振り返りとディスカッションのために

- イエスを救い主、主として受け入れた時の経験を分かち合いましょう。
- あなたにとって、救世軍兵士となるようにとの召しはどのようなものですか？
- 救世軍で兵士となることは、「自らのクリスチャンの信仰を宣言し、分かち合い、生きる」道です。今週のあなたの生活を考えてみてください。どのような具体的な面で、これは現実のものとなったでしょうか？

第1章



私は、
イエス・キリストを
私の救い主、
また
主として受け入れた者であり、
この地上における
キリストの教会の一員・
救世軍の兵士となるために、
神の恵みによって
今ここに
次の誓約をいたします。

この章の内容

- 救世軍の歴史を概観します。
- 「救世軍兵士の誓約」の全体像。―私たちが信じることが、どのように私たちの価値観、態度、行動、生活様式の選択となって現されていくのかが示されています。
- 救世軍兵士にとっての「誓約」の意味。誓約したことを生きる上で、私たちの内に与えられる神の恵みこそが大切です。

救世軍

1865 年 6 月、イギリスの首都ロンドンで、ある募集が行われました。マイル・エンド・ウエストにあるパブ「ブラインド・ベガー」の前で行われる野外集会のために、キリスト教の信仰をもつ人物ならば誰でもよいので語ってほしい、というのです。この呼びかけに応じたのが、メソジスト教会の牧師であったウイリアム・ブースでした。そして、これが後にウイリアム及びカサリン・ブース夫妻による救世軍の創立にまで至る一連の出来事の始まりでした。ウイリアム・ブースは「東ロンドン特別礼拝委員会」に招かれ、一時的にテント伝道の責任を引き受けました。そして、6 週間の伝道を通して、東ロンドンで暮らす人々のために恒久的な伝道活動を設立しなければならない、と確信しました。当初、その働きは「クリスチャン・リバイバル協会」(the Christian Revival Association) と呼ばれましたが、1867 年に「東ロンドン・キリスト教伝道会」(the East London Christian Mission)、1869 年に「キリスト教伝道会」(The Christian Mission) と名前を変え、1878 年に「救世軍」(The Salvation Army) となりました。

「救世軍」という名称に変わったことによって、軍隊の用語や慣習が採り入れられるようになりました。ウイリアム・ブースは「大将」となり、他の階級も加えられました。会員は「兵士」となり、軍隊流の組織や運営方式が発展しました。制服や軍隊的なシンボルも導入されました。
「血と火」という標語は、私たちの救いのためのキリストの死と、私たちの人生における聖霊の聖(きよ)めの業(わざ)を兵士に思い起こさせます。
「軍旗」は、3 つの色で構成されており、赤色はイエスの血を、黄色は聖霊の火を、青色は神の聖さを表しています。
「紋章（クレスト）」は、様々なシンボルが組み合わさってできていますが、それらはみな救い、聖潔(きよめ)、永遠の命を表しています※2。
「救世軍」という文字が入った「赤い盾（レッドシールド）」は、私たちが何者であり、何を目的としているかという証しを共有するものです。私たちの目的とは、神の救いによる、変革する力を証ししていくことです。

会員になる者に要求される基準は、軍隊のメタファー（隠喩(いんゆ)）を用いて、「軍中の約束」（現「救世軍兵士の誓約」）として記されています。また、規律を守り、教えに従うことに関する枠組みは、「軍令及び軍律」として表現されます。

「軍中の約束」が初めて使われたのは、1878 年から 1882 年の間です。初期の版には教理についての言及はありませんでした。しかしやがて、私たちの信仰について抜粋し、要約したものが加えられました。1950 年代になって、救世軍の教理の全文が「軍中の約束」に加えられるようになりました。その後、若干の文言について修正があり、1975 年には禁煙の項目が追加されました。そして 1980 年代に大幅な改訂が行われました。現在は 1988 年 9 月に行われた万国指導者会議において承認された「救世軍兵士の誓約」が用いられています。（訳注：2004 年から「軍中の約束」という表現は用いられていません。）

国際的な軍隊として

救世軍は国際的な運動（ムーブメント）となりました。ウイリアム・ブースが亡くなった 1912 年、救世軍は 58 カ国で活動していました。それが今では 130 カ国以上に展開しており、さらに拡大を目指しています。

国際主義は、救世軍の霊的な原則であると同時に、実際的な組織のかたちでもあります。国際主義は、人種、社会の階層、性別、その他のクリスチャンの全き交わりを妨げる可能性のあるものによって、キリストを信じる者たちが分けられることはないことを示します（ガラテヤ 3：28）※3。それはまた、救世軍が人材や資源を、最も緊急に必要としているところに派遣することができることを意味しています。大将の権威は、世界共通の方針を維持する助けとなります。ただし、大将は最高の権威をもつとしても、救世軍が受け入れている原則から逸脱(いつだつ)することはできません。大将が他の指導者たちに委託する権限についても同じような

※2　救世軍紋章（クレスト）の各部は次のことを表している。
a. 丸い形の太陽……聖霊の光と火
b. 十字架……主イエス・キリストの十字架
c.「S」の字……「救い」を意味する英語「サルベーション」(Salvation) の頭文字
d. 剣……神様と霊魂の救いにおける戦争
e. 弾丸……救いの真理（福音の真理）
f. 冠……終わりまで忠実なすべての救世軍人に、神が与えたもう栄光の冠
g.「血と火」の標語……イエスの血による救いと、心を聖め、力を与える聖霊の火

※3　本書で引用している聖書の言葉及び聖書箇所は、日本聖書協会『新共同訳』を使用。(認可済)　なお、聖書引照では、聖書各書の略語を用いた。

制限が設けられているため、救世軍の指導体制は安全かつ柔軟なものとなっています。

普遍的教会（ユニバーサル・チャーチ）として

救世軍は、普遍的なキリスト教会の一部です※4。『救世軍教理ハンドブック』では、次のように書かれています。

> 救世軍人は、キリストの体の一部です。私たちは、自分たちの特色を表明しつつも、公同の教会と共通の基盤をもちます。救世軍は、教会における独自の立場をとりつつ、他の教派や信者と、その使命と働きを共にするのです。私たちは、一つの公同の教会の一部です※5。

それゆえ、救世軍の兵士は普遍的教会に属しており、キリスト教の信仰や特徴の多くを他のクリスチャンと共有しています。しかしまた、救世軍としての特質や活動ももっています※6。

サクラメント〈聖礼典〉は、「目に見えない霊の恵みの、目に見えるしるし」※7、と言い表されてきました。サクラメントにおいてクリスチャンは、日常にあるものを通して神聖なものを経験します。救世軍は、多くの教派において伝統的なサクラメントが重んじられていることを認めますが、洗礼と聖餐（せいさん）（主の晩餐）を行わなくとも完全なクリスチャン生活を送ることができる可能性を証ししています。

> キリストのサクラメント〈聖礼典〉的な民として、私たちは、自身の生活経験にキリストが生きて働いておられるのを見いだします。私たちは自分の生活を、イエスの臨在、賜物（たまもの）、癒（いや）し、和解、喜びなど、地上におけるイエスの生活と関連づけて喜び祝うのです。
>
> 私たちはサクラメント的な共同体です。なぜなら、生活も、働きも、喜び祝うことも、唯一の真のサクラメントであるキリストに、その中心を置いているからです。私たちの共に生きる生活もサクラメント的です。なぜならば、私たちはキリストを信じる信仰によって生きているので、私たちの毎日の生活自体が、幾度となく与えられる身にあまる、思いもかけない恵みを明らかにしているからです※8。

※4　『救世軍教理ハンドブック』（救世軍出版供給部〔2020年（原著2010年）〕）、付録5.「キリストの体」における救世軍、310～318頁。
※5　『救世軍教理ハンドブック』救世軍人の教会理解について、247頁
※6　基礎となる学びとして、『ワン アーミー（ひとつの救世軍）』（The One Army）のシリーズが有益。https://www.salvationarmy.org/onearmy
※7　イングランド国教会のカテキズム（教理問答）より。

救世軍兵士の誓約

「救世軍兵士の誓約」（以下、「兵士の誓約」と略）は、信仰の宣言と誓約から始まります。この最初の宣言は、イエス・キリストによる救いの経験と救世軍の新しい兵士になろうとする意図を要約しています。

1. 私は、イエス・キリストを私の救い主、また主として受け入れた者であり、この地上におけるキリストの教会の一員・救世軍の兵士となるために、神の恵みによって今ここに次の誓約をいたします。

「兵士の誓約」は次に、救世軍の11か条の教理に対する誓約に進みます。

2. 私は、救世軍教理11か条のうちに示されている神の言葉の真理を信じ、これに従って生きることを約束いたします。

救世軍教理

1. われらは、旧新約聖書が神の感動によりて与えられたること、また聖書のみが、クリスチャンの信仰及び実行に関する、神の法規たることを信ず。
2. われらは、無限に完全なる独一の神ありて、万物の創造者、保持者、また統治者にして唯これのみ、宗教的礼拝の真の対象たることを信ず。
3. われらは、神の中（なか）に父、子、聖霊なる三つの人格ありて、本質においては、分かつべからざるもの、権能と栄光とにおいては同等たること

※8　『救世軍教理ハンドブック』教会：スタディーノートE.3、270頁

を信ず。

4. われらは、イエス・キリストの人格の中(なか)に神性(しんせい)と人性(じんせい)とが結合していて、彼は正（まさ）しく真（しん）に神にして、また、正（まさ）しく真（しん）に人たることを信ず。
5. われらは、われらの最初の父母が、罪なき者として創造されたが、彼らの不従順によりてその純潔と幸福とを失い、堕落の結果、すべての人みな罪人（つみびと）となり、全く邪悪になり、またかかる者として当然神の怒りを受くべき者なることを信ず。
6. われらは、主イエス・キリストが、その苦難と死とによりて、全世界のために償罪（しょうざい）をしたもうたゆえに、何人（なにびと）でも欲する者は救われ得ることを信ず。
7. われらは、神に対して悔い改めること、われらの主イエス・キリストを信ずること、また聖霊によりて新たに生まれることは、救いに必要なりと信ず。
8. われらは、われらの主イエス・キリストを信ずることにより、恩恵（めぐみ）によりて義とされること、また信ずる者はそのうちに証（あかし）を有することを信ず。
9. われらは、救いの状態の持続は、キリストに対する信仰と服従との持続によることを信ず。
10. われらは、「全く潔（きよ）く」されることはすべての信者の特権にして、「霊と心と体とを全く守」られて、「われらの主イエス・キリストの来りたもうとき責むべき所なき」に至り得ることを信ず。
11. われらは、霊魂（れいこん）の不滅、身体（しんたい）の復活、世の終わりの総審判、正しき者の永遠の幸福、及び悪しき者の永遠の刑罰を信ず。

「兵士の誓約」の後半部分は、これらの教理に表されている信仰と、信仰から生じる価値観や生活様式の選択が、救世軍兵士の一人ひとりの生活においてどのように明らかにされるべきかを明確に提示しています。一連の声明は、キリストとの交わりが私たちの人生全体の基盤となる道筋をまとめています。「私は……約束いたします」という表現には、神が自分たちに求めておられる者となり、自分たちの救いが映し出される生き方、また救いを証しする生き方をするという強い意志が込められています。そして、神は、私たちに対する愛によって、私たちが忠実であり続けるため、神を愛し、従うために必要な資源を与えてくださいます。

3. 私は、日ごとの歩みにおいて聖霊の働きと導きに従い、礼拝と祈りとみ言葉と自制とにより、恵みによって成長するよう努めることを約束いたします。
4. 私は、この世の価値観によってではなく、神の国の価値観に従って生きることを約束いたします。
5. 私は、どのような場所でも、どのような時にも、クリスチャンとしての高い水準をあかしし、思いにおいても、言葉においても、行為においても、恥ずべき、汚（けが）れた、不真実な、神を汚（けが）すような、不正直な、不道徳なものについては、これを拒否することを約束いたします。
6. 私は、家族、隣人、同僚、他の救世軍人、私が責任を負うべき人々、その他すべての人たちとの関係の中で、クリスチャンの高い理想を維持することを約束いたします。
7. 私は、結婚と家庭生活との神聖さを保ちつづけることを約束いたします。
8. 私は、私に与えられた時間・賜物・金銭・財産、さらに私の体と知性と霊性との管理については神に対して責任があると認め、それらの忠実な管理者となることを約束いたします。
9. 私は、アルコール性飲料、たばこ、医薬用目的以外の麻薬性薬品の使用、ギャンブル、俗悪なポルノ関連の事物、オカルト等、体や霊性をそこなうすべてのものから遠ざかることを約束いたします。
10. 私は、神が救世軍をおこした目的に忠実であること、すなわち、イエス・キリストの福音を伝え、人々をキリストに導き、助けを要する人や弱い人に、キリストの名により、助けの手を伸べることを約束いたします。
11. 私は、小隊での礼拝や活動に積極的に参加すること、また、救世軍の使命と全世界的な働きを支え、拡張するため、献身的かつ犠牲的に献げものをすることを約束いたします。
12. 私は、救世軍の主義と活動とに真実を尽くし、指導者に従うことを約束いたします。また、時が良くても悪くても、救世軍の精神を公に示すことを約束いたします。

最後に、兵士となる者は次のように宣言します。

13. 私は、私の救いのために死に、そして今生きておられるキリストの愛が私に迫り、生涯を全世界の救いのため献げるよう求めていることを確信し、今ここに、私の自由意志によって「兵士の誓約」に記名調印し誓約す

るにあたり、列席のすべての方々が証人となるよう求めます。そして、私は、神の助けによって、救世軍のまことの兵士であるとの十分な決意をここに宣言いたします。

神聖な誓約

「兵士の誓約」の最初の宣言（英文）には、「神聖な契約」という表現が出てきます。これは、救世軍の兵士であることが、ただ「兵士名簿」に氏名を登録すること以上のもの、あるいは、救世軍の活動や奉仕に参加する機会が広がること以上のものであることを示しています。私たちの信じることや私たちが誓約することに調和するような生活スタイルを選ぶ上で、「兵士の誓約」は、私たちと神との交わりにおいて、また、活きた弟子として主に従うという私たちの召しにおいて、欠くことのできないものです。

「契約」は、二者の間の約束、特権、責任を定めた合意や約定（やくじょう）を形に表したものです。聖書において神と人との間で結ばれる契約は、いつも神によって開始されます。神が責任や条件を決定し、契約を確定されます（創世 12：1～3、出エジプト 19：3～6、サムエル下 7：12～16）。契約は神の恵みと祝福のしるしであり、また、神の愛と保護を約束するものです。その応答として人間は、律法に示されているように、神に対して従順に生きることを求められます。旧約聖書には、神に従うために人間が苦闘したこと、そして、彼らが神に従うことに失敗した時には、神がくりかえし恵みのうちに彼らに手を差し伸べ、新しい始まりをお与えになったことが伝えられています。

その後に、預言者エレミヤが、人々の心に記される新しい契約について語りました（エレミヤ 31：31～33）。この新しい契約は、イエスの生涯、死、そして復活によって成就（じょうじゅ）しました。新約聖書において、イエスは、私たちと神との新しい契約が神との関係に根ざすものであること、それが律法に相反するものではなく、むしろ律法を完成させるものであることを示されました（マタイ 5：17）。

「兵士の誓約」を行う時、救世軍兵士一人ひとりは、神と契約を結ぶことになります。その契約は、私たちが従順と愛に満ちた神との関係に入るようにという、神の招きと神の召しから生み出されたものです。そのような愛の関係を通して、神は、私たちが忠実な愛と従順を保っていくことができるように、必要とする資源を与えてくださいます。私たちは、救世軍兵士として召されています※9。「兵士の誓約」は、私たちが愛と使命と奉仕に自分自身を献（ささ）げながら、イエスに示された神の愛に応答していくための一つの道筋を提供しています。「兵士の誓約」における数々の約束は、神に対する約束です。それらの約束が、救世軍の兵士としての奉仕となって現れるのです※10。

このような誓約は、私たちがただ神の恵みに頼ることによってのみ可能となります。神の恵みは、いつまでも続く愛に満ちた助けとなってクリスチャンに向かい、その生涯全体に伴います。聖書は、私たちが「恵みにより、信仰によって救われ」たこと、またそれは「自らの力によるのではなく、神の賜物」であると述べています（エフェソ 2：8）。救いも、また聖潔（きよめ）における成長も、神の恵みの賜物です。パウロは、コリントの人々との関係において、自分が神の恵みだけを頼りとしてきたと証ししています。「わたしたちは世の中で、とりわけあなたがたに対して、人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきました。このことは、良心も証しするところで、わたしたちの誇りです。」（コリント二 1：12）

「兵士の誓約」をし、守ることは、私たちの人生に与えられる神の恵みによってのみ可能です。神の恵みによって、私たちは霊感を与えられ、神が求められる者になるために力を与えられます。誓約の文章は約束の表明となっており、私たちの真剣な思いを明らかにするものとなっています。もしそれらの約束を、ただ自分の意志の力によって完璧（かんぺき）に守らなければならない規則としてだけ読んでしまうと、失敗と罪悪感の悪循環に陥ってしまうかもしれません。そうなると、自分たちが神の子であるという理解、他の人々との関係、神との関係といったものが損なわれてしまうでしょう。私たちは、救世軍人の共同体の立会いのもとで約束をします。時には、私たちは約束を完全に守って生きようと努力して、失敗することもあるでしょう。そのような場合には、神と私自身の関係、それと共に仲間の

※9 『ワン　アーミー（ひとつの救世軍）』シリーズ 2　召命
www.salvationarmy.org/onearmy/incalling
※10 『ワン　アーミー（ひとつの救世軍）』シリーズ 3　誓約
www.salvationarmy.org/onearmy/incovenant

兵士や指導者の支えが、さらに前進する道を見いだす助けとなります。私たちは、自分に責任を与える人々が、愛と親切によって支援してくれることを期待することができます。彼らはできるかぎり、私たちが神との関係や救世軍兵士としての責任を回復できるように、対策を講じてくれるでしょう。救世軍の兵士として生きることを追い求める時、いつも神の恵みにより頼みます。この恵みが、喜びにあふれ、実り豊かで、冒険に満ちたクリスチャンの生涯を可能にしてくれるのです。

振り返りとディスカッションのために

- あなたの国の救世軍の働きについて、どんなことを知っていますか。
  他の国々において救世軍がどのように活動しているかを調べることも役立つでしょう。
- 神に誓約するということは、あなたにとってどのような意味がありますか。
- 誓約を守り続けるために、どのようなことが助けになるでしょうか。

第2章

**私は、
救世軍教理 11 か条
のうちに
示されている
神の言葉の真理を
信じ、
これに従って
生きることを
約束いたします。**

この章の内容

- 信仰が生活の中に生かされていることが重要です。
- 「忠実な信仰者たちが合意したもの 」として教理が重要です。教理は、聖書についての教会の理解に基づいています。
- 救世軍の教理の歴史的なルーツ。
- 救世軍教理にはキリスト教の信仰の類型が表されています。

救世軍人の信仰とその実践は、聖書とその人の経験とキリスト教会に代々伝わってきたものに根ざしています。救世軍の大切な信仰は、11の信仰箇条に述べられています。それは教理とも呼ばれます。

救世軍人にとって信仰と行動は常に切り離すことができないものです。イエスが主であると信じることは、そのことを単に知的に受け入れることではありません。それは、私たちが何をなすか、どういう人であるか、これからどういう人になるかを、変えていくものなのです。信仰は生活の中に生かされていかなければなりません。そして、この信仰の生活によって自分の神についての経験が成長し、発展していくのです。ですから、信仰がイエスに連なる新しい生活の発見へと導いてくれるのです。

聖書は、キリスト教の信仰を理解し、実践するための中心となるものです。私たちが聖書を読み、それが自分の生活や環境に関わりがあるとわかると、私たちは今の時代にあって、神の民となるのです。聖書を読むことを続け、御言葉（みことば）を読み込み、キリスト教の教えの光を受けて御言葉をよく考えていくなら、神がどういう方であるかがわかるようになり、さらに学ぶべきことがあると気づきます。

聖書は単に神の民の歴史なのではありません。それは私たちを教え、挑戦し、霊感を与え、慰（なぐさ）めるものです。最初に聖書を書いた人々の経験とは大いに異なる言語や文化の中に翻訳されていてもです。イエスの受肉についての霊的で神学的な深い意味が、ほんのわずかな言葉でまとめられています。「言は肉となって」（ヨハネ 1:14）―神の恩寵（おんちょう）の大きさがはっきりとした声明として表されています。「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださった」（ローマ 5:8）。そして私たちクリスチャンの究極の規範は、コリントの信徒への手紙一 13 章の美しい文に書かれています。それをまとめたすばらしい言葉が 13 節にあります。「その中で最も大いなるものは、愛である。」

聖書はクリスチャン生活をしていく上で拠（よ）り所となるものです。私たちがクリスチャンとして行うことは、自分の信仰、神との個人的な関係、この世で生きていく経験などの相互作用の中に現れてきます。どの時代にあっても、教会の任務は、聖書の権威に従い、キリスト教が伝えてきたものを守って、生きていくことなのです。

教理は、教会が信仰をどのように理解してきたかという歴史です。教理は信仰を探究し、説明するものです。説教者、教師、神学者、その他のクリスチャンたちが、自分たちの時代の中で、聖書に表されている神と創造物と人間の関係について理解し、考えていくうちに、教理がつくり出されていきました。教理は「忠実な信仰者たちの合意したもの」と言われることがあります。聖書はキリスト教の教理の基礎となるものであり、それに反する規範は審査されます。

教理は、神と人間とクリスチャンの人生の旅についての救世軍人の理解を深め、明らかにします。教理は信仰をまとめたもので、救世軍人が人生の中で経験することを理解し、その価値を認めることを助ける基礎となるもので、それによって私たちは忠実に生きることができるのです。信仰箇条に述べられている神との関係が、私たちの日常生活の中にどのように現されてくるかを、「兵士の誓約」が示しています。私たちのキリストとの関係が成熟してくると、私たちの態度、思い、動機、行動が導かれていきます。もし、信仰が行動に現わされないならば、それはキリストへの真の信仰ではありません。

信仰箇条（教理）

「イエスは主である」（コリント一 12:3）という告白に要約されている、キリストとの個人的な関係がキリスト教の核心にあります。この告白は、初期の信者たちが互いへの挨拶（あいさつ）として、また、信仰の証しとして用いていました。初期の教会が大きくなるに従って、信者たちはお互いの信仰の成長のために助け合うことの大切さに気づきました。彼らは信仰をもった一人ひとりの個人であるだけでなく、キリストに従う者であるとはどういうことかを確かなものにするために、互いに支え合い、考え合う共同体だったのです。信仰は非常に個人的なものですが、他の信者たちとの交わりの中で生き生きしたものになっていくのです。

何世紀にもわたって、教会は信仰についての共通の経験を表現し、信条、信仰の声明にある「イエスは主である」との信仰告白を広めていくことを学びました。キリスト教信仰の初期の数世紀にさかのぼる 3 つの信条は、使徒信条、ニケヤ信条、アタナシウス信条ですが、これらは古典的信条として知られています[※11]。その後、何世紀にもわたって、他の信仰の信条や声明がクリスチャンのグループから出されています。それらはそれぞれの教会や教派の教理を説明し、深める

ためのものでした。

救世軍の信仰箇条（教理）も同様な役割を果たします。そのルーツはウェスレーのメソジスト派の伝統にあり、その言葉と内容はメソジスト新派の教理に似通っています。それは1838年にまでさかのぼります[※12]。ウイリアム・ブースはメソジスト新派の牧師でしたが、その派の創設者たちは、自分たちの教理は「ウェスレー氏によって教えられたメソジズムの教え」だと主張します。救世軍人は新生、聖潔（きよめ）、福音がすべての人のためであること、人間には自由意志があることなどを強調しますが、それらは皆、メソジズムからきており、メソジズムの神学は幾世紀にもわたる教会の合意に基づいているのです。

1865年にウイリアム・ブースはキリスト教伝道会（クリスチャン・ミッション）の七つの信仰箇条を採用しました。1870年に三つの条文が加えられ、1876年にもう一つ、現在の教理第9条が加えられました。加えられた条文も、メソジスト新派の教理にさかのぼることができます。これらの信仰箇条は、1980年の救世軍憲法第1条となっています。

教理は、教会の教えです。救世軍の11か条の教理は個人的な信仰と共通のビジョンの表れなのです。それらは伝統的な教会の信条に沿っており、救世軍人が、地上におけるキリストの体、教会に属する者であることを示しています。11の条文については『救世軍教理ハンドブック』に細かく書かれており、他にも助けとなる書物があります[※13]。

救世軍の11か条の教理は信仰の声明としてそれぞれの条文を分けて教えられ、検討されることがあります。それは一つひとつを全体の一部とみなす限り、詳しい学びとして役に立ちます。それを全体として読むと、信仰の類型や進み具合を知ることができます。聖書が示すところに根ざして、私たちは神が三位一体（さんみいったい）であること、人間が罪によって神から離れていること、信ずるすべての者が救われる

※11 『救世軍教理ハンドブック』付録1. 古典的信条、277～281頁
※12 『救世軍教理ハンドブック』付録2. メソジスト新派の教理（1838年）、282、283頁
※13 例えば“Doctrine for Today”, Salvation Books, 2017（邦訳未）

ということを理解することができるのです。聖潔は信ずるすべての者が受けることのできる特権です。
教理第1条には聖書が神の感動（霊感）によって書かれたとあります。そのすばらしい感動のゆえに、聖書はクリスチャンの信仰と実践の源なのです。聖書に表され、認められた真理が、現代の世界でも信仰を燃え上がらせているのです。

教理第2条は、すべてのものの創造者、保持者、統治者である神について述べています。礼拝において救世軍人たちは忠誠を尽くすに値する唯一の方、神に心から応答するのです。

教理第3条は、独一であり、同時に父、子、聖霊なる三つの人格をもつ神について述べています。この三つの人格は三位一体で、永遠なる方で、互いに結び合わさっているのです。「三つの人格（位格）は、一人ひとりでありながら一つであり、違うものでありながら分離されてはいないのです[※14]。」三位一体は、神が父であり創造者、御子（みこ）は救い主、弟子たちの友であり、弟子としてくださる方、聖霊は私たちを神の民として聖（きよ）めてくださり、助けてくださり、力づけてくださる方であることを表しています。

教理第4条は、御子がまさしく真に人であり、また、救いと新生を与えてくださる神であると述べています。

教理第5条は、人間であるということがどういうものであるか、人間は堕落し、神から離れ、神の贈り物であるイエスと、その十字架上での犠牲によってのみ救われると述べています。（教理第6条）

教理第6～10条は聖書の主なテーマについて述べており、神の恵みと人間の応答、私たちが神を信じることを選んで生きる時に神がなしてくださることなどの相互作用が書かれています。そこには、救い、継続する神の恵み、キリストを信じる信仰に導かれ、引き続き造りかえられ、聖くされる人々の旅について述べられています。教理第6、7、8条は特に十字架上でのイエスの犠牲のわざ、すべ

※14 『救世軍教理ハンドブック』第3章A、51頁

ての人が救われること、救われるには応答が必要であることなどが書かれています。教理第 9、10 条は、救いの状態の持続には、聖潔とキリストに似た者としての成長が必要であると述べています。

最後に、教理第 11 条は、究極の救いと私たちがこの世で行う選択の結果について述べています。

私たちが救世軍の兵士になる時、信仰箇条に述べられている聖書の真理を信じ、その信仰と一致した生活をすることを約束します。教理に書かれている霊的真理は、「兵士の誓約」の中に実際に合うように書かれています。

振り返りとディスカッションのために

- 「救世軍人にとって信仰と行動は切り離すことができないものです。」あなたの小隊でこのことがどのように現れているか、話し合ってみましょう。
- 教理を注意深く読みましょう。そこに書かれている信仰についての理解は、あなたの毎日の生活に何か気づきを与えましたか。
- 私たちの信仰が、聖書を理解することとともに、キリスト教会が受け継いできたものに根ざしていることが大切なのはなぜですか。

第3章

私は、
日ごとの歩みにおいて
聖霊の働きと導きに従い、
礼拝と祈りと
み言葉と自制とにより、
恵みによって
成長するよう
努めることを
約束いたします。

この章の内容

- 聖霊に対して従順に応答することが、なぜ重要なのでしょうか。
- 聖霊の声に耳を傾けようとするときにいくつかの課題に直面します。
- 私たちがクリスチャンとして成長する過程において、霊的な訓練が重要です。

救世軍の兵士となることを選択することは、神の権威のもとに自分の身を置き、生活の中で聖霊に働いていただく生き方の一つです。それは同時に、救世軍の優先事項及びその実践に従って生きることを選び取ることにより、自分が救世軍の一員であることを明らかにすることでもあります。

救世軍人の誓約のこの条項は、私たちの献身のダイナミックな性質を表しています。私たちが神と関わりをもつとき、私たちのあり方や、行動に変化を及ぼします。兵士になれば、自動的に私たちが目指す成熟したクリスチャンになれるわけではありません。兵士になることは、成熟へと成長しようという私たちの確かな決意のしるしとすべきです（エフェソ 4：13）。兵士であることは過程であって、聖霊に対して心を開いて、キリストの弟子として成長することが求められる旅路なのです。この旅路を進めるときに、この招きにふさわしく歩む力が与えられることを見いだします（エフェソ 4:1）。『救世軍教理ハンドブック』を読むと、神に心を開き、従順で神とつながっている「親密な神との霊的関係」が可能であることがわかります（ヨハネ 15：1～7）。この霊的関係は、私たちをよりキリストに似る者となるようにしてくださいます（ローマ 8：29、エフェソ 4：13～15、ペトロ二 3：18、ヨハネ一 3：1～3）。さらに、私たちの生活に、神の聖（きよ）さが明らかにされるようになります※15。

聖霊の働きと導き

救いは、聖霊の働きを通してのみ、実現されます。教理第 7 条は、「われらは、神に対して悔い改めること、われらの主イエス・キリストを信ずること、また聖霊によりて新たに生まれることは、救いに必要なりと信ず」としています。しかしながら、聖霊の働きは、救いの時のみに限定されていません。聖霊に従順に従うとき、私たちの信仰は成熟し成長するのです。求められていることは、成長が必要であることを自覚し、生活の中での聖霊の働きにより、変えていただきたいという意欲です。

この旅路の細部は、人によって異なることでしょう。しかし、ほとんどの人において、霊的訓練、人からの影響、自分の生活や出来事の反省、さらには、救世軍の共同体の知恵が関与しています。これら個々の影響は、私たちの生活の時期に応じて異なることでしょうが、それらは、私たちクリスチャンの成長に大きな影響を及ぼします。しかし、それら「恵みの手段」は、私たちの聖霊への服従なしには、成長には結びつかないでしょう。

※15『救世軍教理ハンドブック』第 10 章 A.5、195 頁

私は従います

進んで従う意欲は、私たちと神との関係において根本的なことです。聖書が語っていることは、民が従順であれば、民は栄えるであろう、という神の求めの物語と共に、懲（こ）りずに繰り返す民の不従順と、自分たちの運命は自分たちが決めようとする企ての物語です。そのたびに、神は壊れた関係を回復する道を提供されたのですが、そのそばから彼らは失敗しました。創造の物語の当初から、不従順、失敗そして回復のパターンが、イスラエルの歴史を通じて繰り返されています。これらは、律法の授与（申命 5 章）、士師たちの物語（士師 2：10～19）、王国の歴史（列王上 2：2、3、11：33～38）、預言者たちのメッセージ（エレミヤ 31：1～33）及び詩編の詩歌（詩編 119 編）などを通して、様々な仕方で語られています。最終的に人類史上の重要な時点で、神はイエスを通して、今までにない新しい仕方で行動されました。この時以来、もはや従順は律法に根ざすものではなく、キリストの死と復活によって可能になった神との関係に根ざすものとなりました（ローマ 5：8）。この従順さは、神の愛への素直な応答であり、パウロは、これを真の礼拝の特質として「生けるいけにえ」（ローマ 11：30～32、12：1、2）と表現しました。私たちの従順は、神が私たちに提供してくださったことへの応答ですが、時に私たちの生来の性質は、従順への招きを、私たちを支配しようとする理不尽な要求、あるいは力の見せつけとして再解釈し、それに反発します。神と私たちの関係を出発点とする時にはじめて、従順への要請が私たちへの神の愛のしるしであることが理解できるのです。そして、それが私たちを最善へと導くことと悟り、素直に従うことを選ぶことができます。

この理解なくして、聖霊の導きに従順に従うことは、容易なことではありません。この助けになる様々な要素があります。

聖霊の声を見分けることは、時々困難なことがあります。聖霊の語りかけは一律的な方法ではないので、そのメッセージを聞き逃したり、誤解したりすることも

あります。このメッセージは、礼拝、祈り、聖書の通読、人との会話、音楽や芸術、密室や黙想など、様々な方法によってもたらされます。

同様に、メッセージの本質を見極めることが難しい場合もあります。あるいは、それが純粋に聖霊からのメッセージなのか、確信することが困難なこともあります。どのようなクリスチャンであっても、自分自身の願い、希望あるいは計画を、聖霊の声であると解釈する可能性があります。あるいは、私たち自身の理想や意見にそぐわない場合は、聖霊の導きを無視することがあります。

私たちの応答や従順を吟味する様々な方法があります。その一つは、聖霊への従順であると信じる事柄が、聖書の普遍的なメッセージと一致しているかどうかをよく考えることです。また、他の信者たちがそれを支持しているか、それが「義」、「平安と喜び」の感覚をもたらすのか、置かれた状況がそれを適切かつ時宜にかなったものとするのか、などがあります。しかし、どれも、確実にそうであると保証するものではありません。聖霊に従順かどうかは、最終的に信頼と信仰の問題として判断される事柄なのです。

聖霊に従うことが、時には今までにない分別を求められ、個人的にも、教会内にも、当惑と緊張感を生じさせる場合があります。聖霊が個人の内に預言的に働く時は、人々の現状を混乱させ、法的権威に対して立ち向かうこともあるでしょう。そのような際には、聖書の普遍的メッセージや教会の伝統に照らして、私たちの判断をよく調べたり、成熟したクリスチャンたちの賢明な判断を求めたりして、前進する上での説明責任を果たせるようにすることが、とりわけ重要になります。そうしないと、吟味されていない「ビジョン」の危険性や、個人的な企てを押し通す危険があり、他方では、聖霊の語りかけをいい加減に聴いたり、中途半端に応答したりする危険性もあります。究極的には、救世軍を含めて、キリスト教会の将来は、神の霊に聴き従う個々人及び共同体にかかっているのです。

恵みによって成長する

どの兵士も、態度、動機、行動、考え、発言及び人との交流といった生活のあらゆる場面で、聖霊の感化を受けるように、聖霊の導きを受け入れるべきです。この内的生活を絶えず養うことは、「私たちの信仰生活のため、また、戦いに備えるために……非常に重要」※16 なことです。このことをパウロは、テモテに基本的な注意として与えています。「信心のために自分を鍛えなさい。」なぜなら、「信心は、この世と来るべき世での命を約束するので、すべての点で益となるからです」（テモテ一 4：7、8）。

礼拝、祈り、奉仕及び聖書は、個人的な神との出会いと経験の分かち合いを通して、成長と霊的経験を深める基盤を提供しています。これらは、クリスチャン生活が神との活ける体験であり、神と共なるものであることを思い起こさせます。聖霊に応え従うときに、神の贈り物として成長にあずかります。同時に、私たちが新たな見識や成長を受け入れようと心に定めて、神との関係に力を注ぐ必要があります。

礼拝において私たちは、正当に神に帰すべきこととして、賛美と礼拝を献げます。それは私たちが一人でいる時も、他の人と一緒にいる時も変わらない、霊的な態度です。ヨハネによる福音書 4 章 21 ～ 24 節は、霊と真理をもって神を礼拝する必要を説いています。私たちの礼拝は、外面的な行為だけでなく、神に賛美を献げる私たちが何者であり、どのような姿勢なのかによって、その意義が明らかにされます。

祈りは、神との会話であると表現できます。その中で、私たちの思いや感情を神に伝えることが許されています。さらに重要なことは、私たちの人生への神の目的や、様々な状況における御旨に耳を傾け、理解しようとすることです。それは、私たちを霊的経験の新たなる深みへ導き、私たちの内にあるキリストに似つかわしくない態度を自覚させ、改めさせることでしょう。さらに、自身の生活の中に、あるいは人のために、新しい行動を引き起こすように導くでしょう。祈りとは、神との関係がより深みを増していく、生涯にわたる学びの過程なのです。個人の祈りに適した、様々な祈りの仕方や模範があります。書籍、ガイド、ホームページが参考になりますし、他のクリスチャンとの祈りも有益です。

どの救世軍人にとっても、奉仕は、神を賛美し崇拝する礼拝から生まれ出るもの

※16『救世軍教理ハンドブック』付録 4. 万国霊的生活委員会報告、聖霊による生活の訓練、6、305 頁

で、霊的な成長と発展を見える形に現す、欠かすことのできないことです。私たちの救いは個人的なものであるべきです。クリスチャンの家庭に生まれた、あるいはクリスチャンの環境で育った、と言っても、クリスチャンではありません。しかしながら、信仰は単に個人的な経験でもありません。私たちは他の人々と共にクリスチャンであり、他の人々のためのクリスチャンなのです。私たちの奉仕は、「イエス・キリストの福音を伝え」、また、「助けを要する人や弱い人に、キリストの名により、助けの手を伸べる」ことが含まれます※17。社会の底辺にいる人々を手厚くもてなすと同時に、適切で可能な場合は、不平等をもたらし個々人を傷つけるような、社会的不公正や不平等に立ち向かうことも含まれることでしょう。私たちの奉仕は、聖霊の導きへの従順な行動として、常になされるべきです。

私たちの生活への御言葉（みことば）の語りかけを求めて、聖書を読みまた学ぶことは、私たちが引き続き「御言葉の真理に従って生きる」確かな助けとなります。聖書の普遍的なメッセージは、救世軍人の信仰と実践の土台です。聖書は歴史の記録であるばかりでなく、活（い）ける神の言葉です。「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善（よ）い業（わざ）をも行うことができるように、十分に整えられるのです」（テモテ二 3：16、17）と記されています。聖書を読み、そのメッセージに沿った生活へと挑戦するのに役立つ資料が多数あります※18。

しっかりと聖霊に聞き従うのに役立つ霊的訓練は、他にもあります。それらを習慣とすることで、私たちが霊的に成熟し、完成したクリスチャンへと成長することができます。個人的な訓練として、密室、沈黙、質素な生活、断食、観想や研究などがあります。

他の訓練は、共同体の中で一緒にすることができます。人々と共に旅路を進めることで、お互いに励まし合い支え合い、成長し発展する良い訓練の時となります。集団での訓練には、祝祭の時（大会など）、小グループ、信仰の友、奉仕や温かいもてなしがあります。他のクリスチャンたちと訓練の旅路を共にすることで、お

※17 本書 第10章参照
※18 “Tools for Interpreting the Bible” sar.my/bibleint、“Words of Life”（邦訳未）等

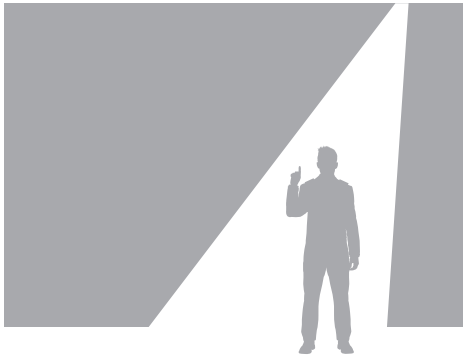
互いに励まし合うことができ、いざと言う時は、私たちの選択とライフスタイルについての説明責任を果たす上で、お互いに支え合う力となります。個々人にとってすべての訓練が適切でふさわしいとは言えませんが、いずれの方法も、聖霊に聞き従うことを現す生活への助けとなることでしょう。

大事なことは、すべての兵士が、輝いて善く生きられるように、励まし、可能にする訓練パターンを見つけることです。実際の礼拝、祈り、聖書研究及び他の訓練は、誰でも同じということはないでしょう。また、その用い方も私たちの人生の折々で変わることでしょう。そうであっても、それらをなおざりにしてはなりません。怠れば、信仰は形ばかりの習慣となり、しぼんで死滅するのは明らかです。クリスチャンたちが何世紀にもわたり経験したことは、神との関係は生涯を通して成長し、変化し、発展するものだということです。霊的な訓練に力を注ぐことは、弟子としての成長を形成する要素です。

振り返りとディスカッションのために

- 聖霊への従順は、あなたの人生のどのような場面で現されていますか？
- どのような霊的訓練をしていますか？　あなたのクリスチャン生活を成長させるためにそれらがどのように役立ったかを書き出してみましょう。
- 聖霊の働きに応答するために、救世軍人はお互いにどのように助け合うことができるでしょうか。
- この章を読み終わり、自分の信仰の成熟のため、変える必要がある事柄があるでしょうか？　これから数カ月、気づいた事柄を実行し、書き留めてみましょう。あなたの信仰はどのように発展するでしょうか？

第4章



私は、
この世の価値観によって
ではなく、
神の国の価値観に従って
生きることを
約束いたします。

この章の内容

- 兵士としての役割は、神との個人的かつプライベートな関係の中だけでは達成されません。キリストにある私たちの生き方が証しとなるための、この社会でのあり方であり、生き方なのです。

- 神の国とは、神の支配と統治を意味します。それは「今」私たちと共にあると同時に、「まだ、これから」でもあります。

- 神の国の価値観と私たちの文化の価値観の間には、摩擦がありえます。この社会の価値観で命と希望をもたらさないものに対して、私たちは立ち向かう必要があります。

- クリスチャンである私たちは、神の国の良い知らせを聞いた者、そしてそれを伝える者として、社会文化の中に遣わされています。イエスがその方法を教えてくださいます。

兵士としての役割は、神との個人的かつプライベートな関係の中だけでは達成されません。キリストにある私たちの生き方が証しとなるための、この社会でのあり方であり、生き方なのです。聖霊に応答し、従うことは、私たちがはっきりと異なった生き方をすること―つまり、神の国の価値観を自分の人生の基準とすることが求められます。

このような意思表示には、私たちの文化や背景にある価値観（ここでは「この世の価値観」と表す）とキリストの価値観の間に摩擦が生じる可能性があることを認めます。これは、単純にこの二つを比べて、自分たちの文化に見られる価値観を自動的に聖（きよ）くないもの、あるいは邪悪なものとして排除すべきだということではありません。どの文化にも善（よ）いものがあるからです。しかし、私たちは社会的な交流をする中で、思慮深く、祈り心をもって、善いものを肯定し、御国（みくに）（神の国）の価値観にそぐわないものを批評する必要があります。神はこの世界に働きかけておられます。神の価値観を自分の価値観にしようと決心することは、神の国を建設するために神とパートナーとなることを意味するのです。

神の民に与えられた役割というのは常に、社会に存在する不健全さ、搾取（さくしゅ）、抑圧といった事柄に挑戦をすることであり（出エジプト 16：3、民数 11：4 ～ 6）、それらと置き換わるものとして、命と希望、そして神の統治のしるしとなるものを提供することでした。これは、キリスト教の一派である救世軍※19 にとっても、個々の状況において不正義に挑（いど）む一人ひとりの兵士にとっても、今なお真実なことです。

私たちはまず、御国の価値観とは何かを知る必要があります。これは聖書を通して知ることができる幅広い概念です。イエスの生涯とミニストリーは、このことを彼の行動で示しています。

神の国

神の国は、マタイによる福音書では「天の国」と呼ばれており、新約聖書におけるイエスの教えの中心に置かれています。これは、神をユダヤ民族の真の王と認める旧約聖書の考え方に基づいており、神の民の人生に現される神の支配や統治を意味すると同時に、歴史の終わりに築かれる神の国を指しています。詩編の作者は、神の支配についてこのように書いています。「正しい裁きは御座（みざ）の基（もとい）　慈（いつく）しみとまことは御前（みまえ）に進みます。」（詩編 89：15）神と結びつく個人やコミュニティのあり方には、この価値観が反映されなければなりません。ですから、御国の価値観は救世軍人の生き方の中心にあるものなのです。

※19　救世軍国際的見解表明「現代奴隷制および人身取引」
https://www.salvationarmy.org/isjc/ips *Modern Slavery and Human Trafficking*

イエスは、神の国が来た（ルカ 17：21）と同時に、これから来る（マタイ 6：10）と教えられました。「今」と「まだ」の間に存在する葛藤（かっとう）は、私たちがこの地上で経験する御国のしるしはまだ不完全だけれども、いつの日か完成するという現実を示しています。今現在は、神の民は「地の塩」と「世の光」（マタイ 5：13、14）でなければなりません。それは、御国の「義と平和と喜び」（ローマ 14：17）という、新しいしるし、そしてこの世とは別のものを表すしるしです。

御国の価値観

イエスはナザレの会堂に行くと、イザヤ書を読み上げ、貧しい人には良い知らせが、囚（とら）われ人には解放が、目の見えない人には視力が、圧迫されている人には自由がもたらされる時が来る、と言われました（ルカ 4：18、19、イザヤ 61：1）。そしてご自分を通して、神の国の時が始まったと言われました。奇跡や物語、会話を通して、イエスは人々を神の国に属するようにと招かれました。神の目的が完了するその時まで、御国の価値観で生きること、そして御国の感化が自らの内にもこの世界においても成長することを勧められたのです。ですから、私たちがイエスの弟子になることを選ぶ時、私たちは御国の価値観を自分のものとすることを選ぶのであり、イエスの使命、優先事項、目的を通して、その価値観の本質を見いだす必要があります。

希望

イエスがイザヤ書から読んだメッセージは、社会の片隅に追いやられ、あるいは社会的なつながりの外に置かれ、または宗教的慣習から疎外（そがい）されているといった生活環境にある人々に対して、希望を約束するものでした。聖書には、「これ

らの者のうちで最も小さい者」に対する神の愛の表れとして、社会の片隅にいる人々の必要に応えるという、個人として、あるいは集合体として、神の民が担うべき責任が強調されています（申命 15：7、8、マタイ 25：31 ～ 45）。イエスが引用したこの聖句は、単に慈善行為を勧めるものではありません。社会の片隅にいたり、社会から排除されている人々が、自分を抑圧しているものからの解放を経験し、御国の一員とされる時のことを見据えているのです。

御国においては、多くの基準が逆転することが特徴です（ルカ 1：51 ～ 53）。この社会の基準で富や祝福と判断されることが、必ずしも天国での市民権を保証するものではありません。むしろ、イエスと話したある青年が代償と共に見いだしたように、それが障害になることもあります（マルコ 10：17 ～ 31）。偉大さと権威とは、まず第一に霊的な属性です。それは、組織的な立場や地位的な権力ではなく、仕えることに示されます（マタイ 20：26 ～ 28）。裕福な人や権力をもつ人の居場所が御国にないということではありませんが、彼らの富や影響力といったものは神の権威の下に置かれなければなりません。その人たちの神との関係性は、彼らの信仰の価値感によって形成されるものであって、社会や文化の価値観によるものではないのです。

私たちが御国の価値観を自分の生き方の基準とするときに、私たちはこの希望の実現に向けて努力すること、それが現実として表される生き方をすること、そしてそうすることが適切で可能な場合には、不平等を容認する文化の慣習に異議を唱えること、を選んでいくのです。

癒しと変革

イエスの言葉は環境は変えられると約束しています。良い知らせ、自由、視力、解放はそのことを表しています。御国とは、癒し、完全性、変革を意味します。御国においては、病、衰え、抑圧は、健全さ、活力、真の自由に置き換えられます。なぜなら、御国のしるしは、神との関係の中で見いだされる平和、一体性、完全性である「シャローム」に回帰することだからです。イエスのミニストリーにおいて、私たちは肉体的な癒しと霊的な刷新を見ることができます。人々が自分に与えられた可能性を発揮し、自分を制限するものから解放されるのです。自分自身や他の人々のためにこの変革を求めるとき、たとえこの地上での変革の経験は部分的なものにとどまったとしても、私たちは神の国の価値観に従って生きていることになります。

正義

神の国の変革の力は、個人、グループ、社会、そして被造物全体に影響を与えるものです。神の統治の基礎である正義は、私たちにとっても基礎となる価値でなければなりません。救世軍の歴史を振り返ると、社会のニーズに応えて正義の声を上げる組織的な活動を行ってきたことが記録に残っています。イギリス（「1885 年刑法修正法令」の改正、1891 年マッチ工場労働者の健康と権利）、日本（1900 年「娼妓取締規則」）、インド（「犯罪者部族」の改革活動）、フランス領ギアナ（1945 年「悪魔島」流刑地閉鎖）などがその例です。21 世紀においては、救世軍が活動する多くの地域で人身取引反対運動が行われ、必要に応じた実際的な支援がされています。救世軍の万国社会正義委員会は、人間の尊厳と社会正義を擁護するための戦略を提唱しています※ 20。

すべての兵士が、国や世界といったレベルで不正に苦しむ人々を擁護することは不可能であり、それぞれの軍国の社会的あるいは政治的情勢によっては、救世軍が対応できる方法が制限されることもあるでしょう。しかし、すべての兵士は、各々の状況が許す限り、自分の生活や他の人々との関係の中で、正義が行われるために声を上げることができます。

排除された人々を受け入れるとき、また抑圧された人々を擁護するとき、それは正義のために戦っていることを意味します。不当な決定について権力者に立ち向かうこと、有害な文化的慣習に異議を唱えること、自分で戦うことができない人々に正義が行われるよう戦うこと、この世界に希望と健全さをもたらすために創造的に行動すること―それは、私たちがこの世の価値観ではなく、神の国の価値観を自分の人生の基準とすることになるのです。

※ 20 救世軍万国社会正義委員会ホームページ https://www.salvationarmy.org/isjc/isjchome

愛の土台

ある宗教的指導者がイエスにどの戒めが最も重要かを尋ねました。「自分自身と自分の持つものすべてをもって、神を愛しなさい。自分自身を愛するのと同じように他の人を愛しなさい」というイエスの答えの重要さに気づいたこの指導者を見て、あなたは神の国に近い、とイエスは言われました（マルコ 12：28 ～ 34）。愛は、神の国の価値観の基礎です。私たちの愛の源は、神にあります。神は愛であり、私たちが人を愛することができるのは、神が私たちを愛してくださるからこそです。ヨハネの手紙一 4 章 10、11 節に、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償（つぐな）ういけにえとして、御子（みこ）をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです」と書かれているとおりです。

生きる上での規範・基準である御国の価値観

イエスの人生において、私たちはこの意味するところを実際に目にすることができます。イエスの人生は、人が本来生きるように意図された生き方のひな型です。イエスが私たちの内に生きてくださるようにとイエスを招き入れ、イエスの命が私たちを通して表されることを望むなら、神の国の価値観が私たちの人生の基準とされることが可能となります。それを現実に表すことに失敗してしまうことがたびたびあったとしてもです。私たちが神に対して決心することが、私たちを造り上げることになります。私たちが何を行うにしても、その決心と一致していなければなりません。

神の国の価値観に従って生きるということは、私たちが置かれた状況において、新たな動機づけと新たな忠誠心をもって行動することを意味します。クリスチャンである私たちは、神の国の良い知らせを聞いた者、そして伝える者として、自分たちの文化の中へと遣わされています。私たちの動機と行動は、神の国に属するとはどういうことかという理解によって形づくられ、私たちは神の国の価値観に基づいて文化的な事柄を評価します。つまり、希望、癒し、変革、正義、愛を奨励することにつながるものについては、それを祝福し、支持するということ、そして、何であれ神の国の価値観に反するものに対しては、異議を唱え、反対すべきだということです。

神の国の価値観に従って生きることには代償が伴い（ルカ 9：57 ～ 62）、また完全に心を定めることが必要とされます（マタイ 13：44 ～ 46）。現実的に実践していくには困難を覚えることもあるでしょう。神の国は「今」であると同時に「まだ」であり、私たちが志す価値観を生きることは必ずしも容易ではないからです。また、私たちが共に生活する人々が、私たちの選ぶ道を選ばず、理解せず、賛同しない時もあります。しかし私たちは、キリストとの関係のゆえに、自分は変革された者であり、自分の置かれた状況に変革をもたらすよう感化する者となれることを信じます（マタイ 13：31 ～ 33）。

これは個人としても、クリスチャンの共同体としても言えることです。私たちの信仰は、神が統治されていることの証しとして、またしるしとして、公の場で生きて示されるものであり、私たちの小隊や交わりは御国の価値観のモデルでなければなりません。イエスが弟子たちに教えられた祈りを祈るとき、私たちは「御国が来ますように。御心（みこころ）が行われますように、天におけるように地の上にも」（マタイ 6：10）と言います。救世軍兵士として、神の国の価値観を、今、私たちの生き方のすべての面において体現することは、私たちの特権であり、責任でもあります。

振り返りとディスカッションのために

・私たちは、神の国の価値観に従って生きるように召されています。
この章に出てきた価値観において、現在の自分は、0（まったくなし）から 10（完全に発揮されている）のスケールのどこにあてはまるでしょうか。なぜそこを選びましたか？　どうしたら、右側に一歩進めることができるでしょうか。そのために必要なことは何でしょうか。

0＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿10

あなたの小隊、信仰の共同体はどうでしょうか。

0＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿10

・考えてみましょう。神の国の価値観に従って生きることは、どのような犠牲と代償が伴いますか？
・健全さや希望を奨励しない社会の価値観に対して、「あの人たちと私たち」という分断を招くことなく、異議を唱えるにはどうしたらよいと思いますか。

第5章

私は、
どのような場所でも、
どのような時にも、
クリスチャンとしての
高い水準をあかしし、
思いにおいても、
言葉においても、
行為においても、
恥ずべき、汚れた、不真実な、
神を汚すような、不正直な、
不道徳なものについては、
これを拒否することを
約束いたします。

この章の内容

- クリスチャンの裏表のない生き方は、キリストを土台とした生活、神への深い献身、聖潔（きよめ）の成長から生まれます。その歩みは聖霊が与える力によって可能とされます。
- 私たちは生活のあらゆる面で、キリストに結ばれた生き方をします。それは、他人の目があってもなくても変わりません。それは生涯をかけた取り組みです。
- 私たちはお互いに対する説明責任を負います。個人として、団体として、なぜそのような決断をしたか、行ったかについて説明する責任があることを確認します。
- 兵士は、裏表のない生き方について失敗や妥協の可能性がありますが、赦（ゆる）されて新しいスタートをする可能性もあることを確認します。

神の国の価値観を選んで生きることの自然な結果として、私たちは生活のあらゆる面でクリスチャンとして裏表のない生き方を見せていくことになります。

クリスチャンの裏表のない生活は、十全とか完全と呼ばれることがあります。それは、「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」（ペトロ一 1：16）という神の恵み深い召命に対する応答として生まれます。それにより、私たちは首尾一貫した生き方をし、思いも、行いも、言葉も、調和の取れたものとなります（コリント二 10：11）。それは、キリストにある私たちの生き方に表され、すべての人間関係やふるまいを通して見られるべきものです。

キリストに根ざした裏表のない生き方 — 聖潔

救世軍兵士は、神が聖霊を通して私たちになさろうとする御業に対して、心を開きます。『救世軍教理ハンドブック』にこう書かれています。

> 神の聖める御業は、生活を一変させる経験であり、それによって力を受けて、生活の徹底的な方向転換をすることができます（コリント二 5：14、15）。それは、キリストの霊が私たちの内においでになり、住まわれるようになるためです（ガラテヤ 2：20、エフェソ 3：14 ～ 19）※21。

聖霊は私たちの内に働いて、聖潔へと召してくださいます。教理の第 10 条は、パウロが書いたテサロニケの信徒への手紙を引用して（テサロニケ一 5：23）こう述べています。「われらは、『全く潔く』されることはすべての信者の特権にして、『霊と心と体とを全く守』られて、『われらの主イエス・キリストの来りたもうとき責むべき所なき』に至り得ることを信ず。」この経験をすることによって、神と私たちとのつながりは深められ、神が私たちのために定められた目的に沿って生きたい、という願いが起こされます。

この聖潔の経験について、パウロは「キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ 2：20）と表現しています。これこそが、クリスチャンの裏表のない生活の土台です。それは、聖霊によって造りかえられる人生を歩むときだけに与えられる結果であり、恵みによって力を受けるはっきりとした瞬間をしばしば伴います。その歩みは、神に自分を献げた時に始まります。自分が神によって愛され受け入れられたと知るとき、心に平安を得ることができ、自分自身を受容し、また、愛をもって神に応答することができます。このつながりによって、私たちの人生は形づくられ、生き方も、思いも、行いも、愛と恵みを映し出すようになり、よりキリストに似た者とされていきます。

聖潔に成長するにつれて、生活のあらゆる面に影響が現れます。私たちがキリストに結ばれて生きるとき、キリストが私たちを通して生きてくださり、イエス・キリストの臨在が私たちを変えてくださいます。私たちの内面が造りかえられると、それは、実際的な変化として現れてきます。聖霊が私たちの思い、動機、態度、行動、反応を練り聖めてくださるのです。私たちの人生は聖霊に満たされた歩みとなり、十全で裏表のないものとなっていきます。

裏表のないクリスチャンの生活を送るための力は、キリストとのつながりを通して与えられ、聖霊によって力づけられます。私たちは善きものに心を注ぎます。そして、そうではない、破滅的で他者を害するような気分や願望を、わきへ押しのけます。どんな状況もクリスチャンとしての視点から見るようになり、キリストとのつながりという観点から物事を評価するようになります。私たちは、裏表のない生き方を意識して選び取ります。

裏表のない生き方の資質

パウロはフィリピの信徒への手紙の中で、キリストに従う生き方の土台について、大切なことを述べています。「すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。」（フィリピ 4：8）健康で十全な生活は、こうした心がけによって導かれます。反対に、私たちが神の国の価値観以外のものによって生き方を決めるならば、裏表のない生活が脅かされることになります。

人前でも、あるいは、だれも見ていない一人きりの時でも、神への献身をするこ

※21『救世軍教理ハンドブック』第 10 章 A.4、193、194 頁

とによって、自分自身が形づくられていきます。裏も表もないということが必要です。それが、全き生活の土台となるのです※22。

裏表のないクリスチャンの人間関係

救世軍兵士がもつ人間関係は、そのどれもが、裏表がなく、十全で、うそ偽りがないものであるべきです。自分と他者との関係が、そうなっていなければ、本当に「キリストに結ばれた」生き方とはなりません。人生は、他者と手を取り合って生きるときに、最も豊かになります。もちろん、文化や状況によってコミュニティーのあり方は変わります。ほとんどの兵士は、それぞれが違うコミュニティーに属しています。それは、自分の家族や友人とのつながり、職場の同僚や、余暇を共に過ごす人たちとのつながり、所属する小隊とのつながりであったりします。いろいろなコミュニティーにあって、自分が他者とどう関わるかによって、裏表のないクリスチャンの生き方の真価を発揮することになります。

私たちのふるまいや反応は首尾一貫して、聖い生き方を示すものであるべきです。私たちは、キリストが人に接し、愛と敬意を示したのと同じように、他者に接するのでなくてはなりません。たとえ、他者が私たちに愛を示さなかったとしても、です。裏表のない生き方をするクリスチャンは、隣人がどんな人であっても愛し、いつでも善意をもって接する必要があります。愛による行いは、誠実な態度を通して、相手に敬意を示すときに、信頼感を培（つちか）い、人間関係を深めます。他者に敬意をもって接し、誠実で裏表のない態度を首尾一貫してとるならば、そのコミュニティーは豊かにされ、すべての人の居場所となるでしょう。しかし、私たちが愛さず、矛盾（むじゅん）していて、他人を裁き、信頼を損ない、裏と表が異なるならば、人間関係は傷つけられ、破壊されてしまいます。

絶えることのない挑戦

クリスチャンとして裏表のない生き方をする、という決意を実行しようとすると、時として、自分が何者であるか、よりも、自分がどんな行いをするか、に注意

※22『救世軍教理ハンドブック』第10章

を奪われてしまうことがあります。裏表のない生き方を、救世軍という囲いを出ない範囲で行動すること、というふうに解釈してしまうのです。それは、例えば、制服を着る、集会に出席する、などです。もちろん、そうした決まりを真剣に守ることは、救世軍の目印であり、大切なことです。しかし、兵士として裏表のない生き方をするのが、ただそれだけだとしたら、私たちに対する神の求めを無視してしまうことになります。

どの兵士も、約束したことを守ることができずに、失敗してしまうことが時々あります。すると、私たちは自分の至らなさを恥ずかしく感じます。また、他者を失望させたくない、あるいは、批判を受けたくない、という恐れから、自分の失敗をひた隠すようになります。どんなに強く献身していても、また、どんなに裏表のない生活をしていても、妥協して裏表のあるふるまいをする可能性があることを、すべての兵士は自覚しなければなりません。それにもかかわらず、赦（ゆる）しを受けて、新しいスタートをすることは、常に可能なのです。そのような回復は、救世軍の指導者やほかの兵士たちが愛をもって励まし、回復に必要な説明責任を果たせるよう後押しをすることで、最も効果的に力を発揮します。

反対に、裏表のない生活を生きようとして葛藤（かっとう）し、困難を覚えているほかの兵士に気づくことがあります。私たちは、そうした戦友、仲間である兵士の傍（かたわ）らに寄り添うことができます。そうした兵士を非難するのではなく、助けの手を差し伸べ、説明責任が果たせるように導くのです。それをするためには、まず自分自身、裏表のない生き方をしていること、正しい動機で生きていることが、必要です。イエスの言葉を思い出しましょう。「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。」（ルカ6：37）勘違いをして自らおごり高ぶり、他人の失敗を裁くことは、たやすいことです。しかし、決してそうであってはなりません。それは、裏表のないクリスチャンの生き方とは言えないからです。

約束した生き方をせず、裏表のあるふるまいをするという、後ろめたい偽善に陥ってしまう危険が本当にあります。それは、裏表のない生き方を妥協させることであり、最終的には、裏と表が異なる生き方に至らせ、信仰も献身も行動もすべてが矛盾した破滅的な結果をもたらします。

そうした危険は救世軍にもキリスト教会全体にも深刻な問題となって現れています。イエスは当時の宗教的指導者の偽善について、「人々の前で天の国を閉ざす」行為だ（マタイ 23:13）と指摘しました。私たちが裏表のない生活をするならば、ふるまいも反応も、人から好意をもたれ、信仰は人生の助けになる良いものだとの印象を与えることができます。しかし、もし妥協して裏も表もある生き方をするならば、信仰の価値そのものを人々は疑うようになるでしょう。救世軍兵士は現代における教会を代表する者のひとりである、とするならば、裏表のない生き方をしない兵士によって救世軍の使命は危険にさらされ、覆（くつがえ）されてしまうことになります。

救世軍の兵士の誓約は、たくさんの条項を含んでいますが、それは、具体的な状況の中で私たちが他者に対して負うところの責任について、大切なことを述べているからです。それについては、他の章で見ていきましょう。どのような場合でも、私たちの模範、態度、ふるまい、反応は、この裏表のないクリスチャンの生活を土台としているべきなのです。

裏表のないクリスチャンの生き方とコミュニティー

コロサイの信徒への手紙 1 章 19、20 節は、キリストの贖（あがな）いの愛より大切なものはほかにない、と告げています。

> 「神は、御心（みこころ）のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子（みこ）の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」

このことから、私たちが出会うどんな状況や問題も、すべてこの愛の中に置かれている、と見ることができます。私たちは、自分の信仰に直接関係はないと思えるような状況であっても、同じ裏表のない態度で見ていくべきなのです。

社会問題、倫理問題、消費主義、メディア、ソーシャルメディア、地方自治、国政、環境問題など、いろいろな問題を考えるときに、私たちは神の国の価値観と、裏表のないクリスチャンの生き方という観点から、私たちの態度を決めていくべきです。私たちが出会うどんな状況にも、適切な判断を下すことができるよう、私たちには内なる助けが与えられています。私たちは、すべての状況において、キリストの価値観、キリストの行いを、現していかなければなりません。

そうすることは、たやすいことではありません。現代の生活のすべての問題に対して、聖書が明白なガイドラインを示しているわけではないからです。『救世軍教理ハンドブック』は、聖書を解釈する上での基本的な原則を説明しています[※23]。また、救世軍の他の出版物や[※24]、キリスト教書籍、それ以外の書籍も、私たちの理解を深める上で助けとなるでしょう。救世軍兵士として、私たちはキリストに結ばれています。そのキリストに助けられて、私たちは問題について考え、評価し、学習し、裏表のない行動と反応へと導かれていくのです。

私たちは、クリスチャンの共同体にあっては、お互いにつながりをもち、助け、助けられることを通して、一緒に神に仕えることができます。信仰に基づくファシリテーション（信仰に基づく共同の取り組み）をすることは、その助けとなります[※25]。しかし、キリスト教会の内外には、多くの問題について様々に異なる見解が存在しているため、それは決して簡単な取り組みではありません。ですから、救世軍兵士は、自分とは異なる主義のクリスチャンを裁いてしまわないよう、注意しなければなりません。

説明責任

「兵士の誓約」では、裏表のないクリスチャンの生き方を実行するために、「思いにおいても、言葉においても、行為においても、恥ずべき、汚れた、不真実な、神を汚すような、不正直な、不道徳なものについては、これを拒否することを約束いたします」と述べられています。これは、非常に高い理想であり、私たちは神とのつながりの中で、これを生き抜くようにと、絶えざる挑戦を受けています。そうするためには、自分を公平に評価し、他者に対する説明責任を果たす用意

※ 23 『救世軍教理ハンドブック』第 1 章、「継続的な学びのために」1.C、18 頁
※ 24 救世軍国際的見解表明（日本語版）https://www.salvationarmy.or.jp/etc/6520 また、*International Development Policies* https://www.salvationarmy.org/isjc/idp（邦訳未）
※ 25 https://www.salvationarmy.org/fbf　これについての翻訳されたガイドブックがある

がなければなりません。説明責任を果たすためには、自分が深い信頼を寄せている人に、個人的な相談相手となってもらい、助言を受けること、あるいは、小グループでの分かち合いをすること、聖別会や兵士会に出席すること、さらには、救世軍の指導者や牧会ケア会議が求めた説明責任の務めをきちんと果たすこと、などがあります※26。

裏表のないクリスチャンの生き方は、団体としての取り組みにも反映されていなければなりません。救世軍は、相互に説明責任を果たすことが、ガバナンス（統治、管理）の重要な土台であるとして、取り組んでいます。

> 私たちが行った決定、行動、それがもたらした結果については、報告し、説明し、質問に答えることができる必要があります。個人としても団体としても、決定し、行動する上で、説明責任から逃れることはできません。それがきちんと機能するとき、信頼が醸成され、人々の能力は開花するのです。私たちはみな、一つの体の肢体です（コリント一 12：12～27）。一つの部分に起きたことは、他の部分にも影響を及ぼすことになります。私たちは、お互いに対する責任を果たし（マタイ 18：15～17）、すべての人の益のために働くのです※27。

ですから、もし、だれかが虐待されている、あるいは、自分が虐待されていることに気がついた場合には、ただちに声を上げて、説明責任が適切に果たされるようにしなければなりません。

裏表のないクリスチャンの生き方とは、キリストに結ばれた命を土台とし、神への献身を深め、聖潔に成長することです。裏表のない生き方は、信仰と文化という複雑な関わりの中を生きる私たちに、羅針盤（らしんばん）となって導きを与えます。救世軍兵士は時に、友だちのグループやコミュニティーや文化の中であたりまえとされている事について、疑問を抱くことがあるでしょう。そういうとき、私たちはそれらと違う考え方や生き方をすることにより、キリストに結ばれた生き方を証しすることができます。ただ、救世軍がつくった決まりを守るということではありません。むしろ、裏表のないクリスチャンの生き方が、より優れていることを示す機会となるのです。

※26『軍令及び軍律　牧会ケア会議の巻』
※27『救世軍のガバナンスの土台（*Foundations of Governance for The Salvation Army*）』「救世軍のガバナンスの神学 'A Salvation Army Theology of Governance'」（邦訳未）https://issuu.com/isjc/docs/a_salvation_army_theology_of_govern6-7

振り返りとディスカッションのために

- 自分の言っていること、大事にしていること、信じていることが、行いと矛盾しているようなところが、あなたの生活にないかどうか考えてみてください。そして、書き出してみましょう。また、なぜそのような矛盾が起きるのかを考えてみてください。
- あなたのもっている人間関係についてふりかえってみましょう。あなたの人間関係は裏表のないものと言えるでしょうか。もし裏表に違いがあるとしたら、なぜそうなってしまっていると思いますか？
- コミュニティーの人々に敬意を表すための方法を書き出してみてください。権力をもっている人と、周辺に押しやられている人のことも考慮してみてください。

第6章

**私は、家族、隣人、
同僚、他の救世軍人、
私が責任を負うべき人々、
その他すべての人たちとの
関係の中で、
クリスチャンの高い理想を
維持することを
約束いたします。**

この章の内容

- 私たちは共同体の中で生きるよう造られています。人間関係と、壊れた人間関係の修復は、キリスト教信仰の重要な部分です。
- 私たちの人間関係は、すべての人間は神の似姿に造られているので尊厳と価値がある、と理解したうえで、「正しい」―愛、調和、一体と一致が基準となる―ものでなければなりません。
- 人間の性という神からの贈り物は、尊重される必要があります。
- 意見の相違や不一致があった場合、私たちは耳を傾け、理解するために努め、また、愛によって違いを受け入れます。

「兵士の誓約」では、私たちが関わるすべての人間関係は、キリストに従う者の意味を理解することによって築かれるべきであることを明確にしています。

この約束は、神の国の価値観を私たちの人生の基準とするという目標と意思を実際的にやり遂げるためのものです。聖書には、歴史の終わりに築かれる神の国における人間関係と社会の調和と一体性が描かれています（イザヤ 11：6 ～ 9、ミカ 4:1 ～ 5）。同様に、イエスは弟子たちの一致を求めてこのように祈られました。「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名（みな）によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです」（ヨハネ 17：11）。神の国の価値観を人生の基準とするとき、健全な人間関係を育（はぐく）み維持することを優先させなければなりません。「私は……約束いたします」と宣言するときに、人生でこれを完全かつ完璧（かんぺき）に果たすことの課題や障害があることを認識します。しかし、私たちは誠実な意思と期待をもってこの約束をします。私たちの信仰が成長し深まるにつれて、正しい人間関係を築く能力も高まると信じているからです。

私生活

人間関係と壊れた関係の修復は、キリスト教信仰の重要な部分です。福音は人間関係の上に成り立っており、神は「キリストによって世を御自分と和解させ」（コリント二 5:19）られました。イエスが示された二つの重要な掟（おきて）（マルコ 12:29 ～ 31）は、神への愛と他者への愛という関係性を重視したものです。

神との関係をもつ存在として、私たちは神に似せて造られているため、すべての人々に尊厳と価値があります。そのため、私たちはお互いにつながることができる自然な能力をもっています。孤立した人生ではなく、コミュニティーの中で生きるように造られています。誰もが唯一の人間であり、誰もが神の目に等しく価値があり、誰もが尊重される存在です。「……私たちは、神と共にあり、私たちが互いにかかわりをもつとき、初めて自己実現をすることができます。神とのかかわりも、私たちの互いのかかわりもないなら、私たちは不完全であり、互いのかかわりによって得られる成熟を経験することもできないのです※28。」

※28『救世軍教理ハンドブック』第 3 章 A、52 頁

イエスの教えは、実践的な例を示しています（マタイ 5 ～ 7 章、ルカ 6：17 ～ 49）。人間関係におけるクリスチャンの理想は、「塩と光」（マタイ 5：13 ～ 16）であるという文脈の中に表されており、それは他の人々が違いを感じ、神に栄光を帰する生き方をすることです。

イエスは、行動だけではなく動機や態度にまで目を向け、他の人々に対する私たちの行動によって、私たちが神の民であることが表現されるべきだと示されました。イエスの教えは、一見些細（ささい）なことでも、または人生を変えるような大きなことでも、常に正しい人間関係を保たなければならないと言っています。関係を傷つけたり、汚したり、軽視したりすることは許されません。それ以上に、神の民である私たちは、困難を感じる壊れた人間関係を、修復し築いていくように命じられています。私たちの目的は、神の完全性を反映させることです（マタイ 5：48）。

性的関係

性的関係を含め、私たちの最も親密な個人的関係を考えるとき、基準は変わらず、神の国の価値観に従って生きることが求められ、それが私たちの価値、態度、行動を形成します。私たちの信仰の共同体がすべての人を歓迎し、敬意をもって接することを、救世軍人として支持します。

すべての人々は神に似せて平等に造られています（創世 1：26、27）。創世記の最初の章では、人間の命の贈り物について書かれており、神はお造りになったすべてのものを「極めて良い」と宣言しておられます（創世 1：31）。神から与えられたものの一つに、人間の性と性的アイデンティティーの形成があります。しかし同時に、私たちの生活に広がる脆（もろ）さは、私たちの性に現れています。

前世紀に行われた医学的、心理的研究により、人間の性の複雑さが明らかになり、複数の複雑な要因が性的アイデンティティーの形成に影響を与えることが理解されつつあります。

クリスチャンとして、私たちの目標と目的は聖潔（きよめ）です（エフェソ 2：8 ～ 10）。ですから、神を敬い、他の人々を尊重する方法で、性をもつ存在として人生で秩序

を保つよう努めなければなりません。クリスチャンの聖潔への献身は、すべての人間関係がキリストへの献身によって築かれることを求めています。したがって、いかなる態度や考え、行動であっても、他人や自分自身を傷つけたり、利用したりするようなものは受け入れられず、神の人類に対する理想を歪(ゆが)めてしまいます。これには、乱交的、強制的、虐待的な性的関係や、あらゆる形態のポルノグラフィーの使用や宣伝も含まれます※29。いかなる種類（肉体的、精神的、性的、霊的）のパートナーへの暴力も、クリスチャンとして決して容認できません。大人と子どもの間のあらゆる性的関係は、特に有害な虐待関係であり、兵士としての使命と働きにそぐわないものです。

人間関係において、私たちが誠実に、忠実に、そして責任感をもって献身的に生きようとするとき、私たちは人間として成長し、キリストに似る者となるのです。神の助けにより、独身者として誠実であり、既婚者として忠実であることが可能です※30。兵士の中には、時折自分の性のあり方（セクシュアリティ）に悩んだり、または性行動においてクリスチャンの規範を守れないと感じる人もいるかもしれません。このような場合は、キリストの恵みと悔い改めによって得られる赦(ゆる)しの確信が必要です。

このような状況においては、救世軍人は牧会ケア会議や指導者たちに、ケアと知恵、恵みをもって行動することを求める権利があります。

対人関係

私たちが神との関係によって定められた範囲の中で生きていくとき、お互いに正しい関係を築くことができます。これは見ず知らずの人との関わりから、友人関係、家庭生活、仕事関係、そして救世軍の家族においても同様に当てはまります。

パウロの手紙では、神との関係がクリスチャンの共同体での人間関係を形成するように、生き方を学ぶことの重要性が繰り返し強調されています。フィリピの信徒への手紙の中から、「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです」（フィリピ 2:5）とクリスチャンは示されています。これは、愛、謙虚さ、そして他者の利益を追求することを述べており、救世軍のどの共同体にも必要なものです。

※29 救世軍国際的見解表明「ポルノグラフィ」（邦訳未）http//www.salvationarmy.org/isjc/ips *Pornography*
※30 本書　第7章参照

コリントの信徒への手紙一 12 章 12 節～ 13 章 13 節では、私たちが共同体の中でどのように行動し、反応するかの基盤に、愛が重要であることを語っています。一人ひとりが異なる資質をもっており、全体の幸福のために様々な賜物(たまもの)やスキルが必要ですが、すべての人間関係に最も重要なことは、愛が基礎となっていることです。私たちの存在と行動が愛に根ざしたものであるとき、その共同体は繁栄し、神の愛を映し出すものとなります。

同様に、コロサイの信徒への手紙 3 章 12 ～ 17 節では、共同体を愛する行動についてまとめています。

> 「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」

> 「また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭(さと)し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。」

共同体での健全な関係は、兵士たちがお互いの幸せのために責任を共有する場をつくります。指導し、受容し、挑戦する機会があるとき、どんな時も愛に基づいて行わなければなりません（エフェソ 4：15、16）。お互いをキリストの体の一部と認識することを学ぶと、お互いの中にキリストを見て、適切に対応することができるようになります。すべての部分が全体の健康のために欠かせないという点に

おいて、相手がその一部分だというイメージは大切です。

私たちは人間であり、神の完璧さを完全に反映することはできないので、関係性に欠陥があることは当たり前です。しかし、だからといってどんな態度や行いも許されるわけではありません。私たちの目標は、常に愛に満ちた関係を育むことです。

私たちは、自分が責任をもっている人々との関係において、クリスチャンの理想に沿って歩むべきです。救世軍の共同体の一員であるということは、責任をもつことを意味し、非公式、公式な過程を通してお互いに説明する義務があります。この訓練を実践することで、他の救世軍人の考えに対する自分の考えを検証し、バランスの取れた判断をする知恵を周囲から得ることができます。また、これらの関係は、一人ひとりが神の姿に似せて造られていることを忘れずに、他者を尊重し、他者の最善の利益を追求することによって築かなければなりません。

お互いに対する責任を真剣に受け入れるとき、私たちは自分の考え、行動、反応を見直すことになり、イエスが教え、生きて示された理想の光の中で人間関係を見直すことで、それを良好にする新たな機会を発見できるかもしれません。

人間関係が困難で、傷つき、または壊れたとき

私たちはクリスチャンとして、互いの相違によって共同体の一致が脅かされる可能性があると感じるときがあります。実際に、イエスはこのことを予測していたようで（マタイ 10：35、36）、使徒言行録やパウロの手紙では、初代教会で調和のとれた生活をするのがいかに大変だったかが記されています（例えば、使徒 6：1～7、11：1～18、コリント一 1：1～17、フィリピ 4：2、3）。相違の中には、現実的で比較的容易に解決できるものもあれば、心の奥底に潜み広範囲にわたる信念のものもあります。意見の相違があるときは、相違点を探り、注意深く耳を傾け、新しい視点を受け入れることが大切です。相違のまま残ってしまうことがあるかもしれませんが、クリスチャンの愛の理想は、分裂が教会を壊してしまわないように関係を維持することを求めています。特に小隊士官や牧会ケア会議員などの小隊の指導者は、お互いに調和をとることが困難と感じる人をサポートし、尊重と受容をもって共に歩み、奉仕する方法を見つけられるように救世軍人を励ます

責任があります。

聖書は、個人としても共同体としても、他の人の行動や反応によって、健全な関係を保つことが困難なときや不可能なときが、現実にあることを示しています。私たちが供え物を神に献げる前に、自分が怒らせた人や反感をもたせた人とまず和解するために行動する必要がある、とイエスは教えられました（マタイ 5：23、24）。同じように、パウロはローマの信徒たちにこう書いています。「互いに思いを一つにし……できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」（ローマ 12：16、18）。他人の態度や行動に責任をもつことはできませんし、時にはそれが原因で損害を被ったり、関係が壊れてしまうことがあります。可能であれば、関係を回復させてすべて円滑にまとめるべきですが、もし不可能な場合は、個人や共同体のダメージを抑え、他の方法で健全な関係を築く方法を模索すべきです。

証人と事例

個人として、救世軍人として、クリスチャンの理想に沿って人間関係を築くときに、私たちは、生活し、働いている社会の中で証人となります。

平和へとつながるクリスチャンの愛（コロサイ 3：12～17）は、現代社会の問題に対処するための知恵をコミュニティーに与えます。それは、グローバル化した緊張状態で、しばしば不一致や分裂を起こし、尊厳をもって共存することが難しい多文化の世界に、直接語られています。私たちの個人的な利益ではなく、相手やグループの利益を求めて関係を築くとき、相違があっても、人々が調和の中で共に生きることを可能にする創造的な戦略と行動を生み出します。

私たちはクリスチャンとして、故郷を追われた人々、境遇や自らの選択によって社会の隅にいる人々など、あらゆる文化や信仰をもつ人々に、敬意と愛をもって証しする方法を見つける必要があります。イエス・キリストの福音は、人々とその状況にどのような意味をもつでしょうか？

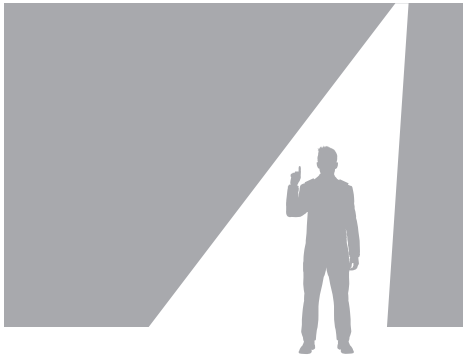
福音のメッセージは、キリストの和解の力が個人を越えて共同体やすべての被造物にまで届く（コロサイ 1：15～20）と語ります。神の国の譬えとして（マタイ 13：

31～34)、大きな木に成長する小さな種や、パン種（酵母）という言葉が使われます。それは、イエスの生涯と働きで始まったことが、成長し花開くということを意味します。私たちがイエスの基準に従って人間関係を築くとき、私たちは利己主義や個人的な利益を求めるのではなく、より広く深い愛の基盤に基づいた人間関係の模範を示し、世界に証しします。

振り返りとディスカッションのために

- あなたが属する共同体において、人間関係が愛に根ざしているときの実際の例を発表してください。
- 神の国の価値観で生きようとする私たちと、他者の価値観が対立したとき、どのようにして人間関係を健全に保つことができるでしょうか?
- 性的関係についてのセクションを振り返ってみましょう。あなたの理解と経験についてどのように考えさせられますか?
- あなたの人生で「壊れた」人間関係はありますか?　その人間関係を修復するために、あなたができることは何ですか?

第7章



私は、
結婚と
家庭生活との
神聖さを
保ちつづけることを
約束いたします。

この章の内容

- 私たちの信仰は神との関係に根ざしており、他の人々との関係を通してそれが表現されます。クリスチャンとしての理想的な姿が私たちの価値観、態度や行動を形づくります。
- 結婚は神聖な神からの贈り物であり、パートナーは互いに尊重しあうことが求められます。
- 独身であることと結婚はどちらも等しく尊ばれるべきものです。
- 家庭生活は個人が成長し、発展する場所とならなければなりません。
- もし関係に亀裂（きれつ）が生じたり、壊れてしまった場合、細やかな牧会的ケアと、健全な関係とは何かを学ぶ機会をもつことが、将来の幸福に必要不可欠となります。

私たちの信仰は神との関係に根ざしており、家族との関係、夫婦関係、クリスチャンの共同体での関係や社会における関係など、他の人々との関係を通してそれが現されます。私たちはキリストにあって何者なのかということが、私たちと他者との関係や他者への反応を形づくります。私たちはクモの巣のように張り巡らされている関係の中で生きていて、それらが友情、サポート、親密さなどの欲求を満たしてくれます。神や他の人との関係を通して私たちは充実感や安心を見いだし、人間として成熟し豊かになることができるのです。

結婚

結婚は、神の人類への愛と、キリストと教会の間にある自己を与える愛の両方を反映しています。救世軍人として、私たちは結婚を神からの贈り物と考えます。それは相互愛の原則を表現し、お互いのパートナーを豊かにし、力を与えるものであり、それらを減少させるものではありません。救世軍は、結婚を一人の男性と女性の人生のための自発的で愛情深い結びつきであると信じます。それは、同意、相互の尊重と忠実さ、奉仕と平等によって特徴づけられる人生を共有することです。それは、性的親密さのための唯一の適切な環境です。この人生の共有には、愛をもって互いに奉仕し、許し、許され、平等と相互性に基づく充実した関係において共に成長したいという意欲が含まれます。そのような平等には、支配ではなく、お互いを尊重することが求められます。クリスチャンの結婚は、相互の愛の原則を表現し、新しい家族をつくります。結婚相手はお互いにそのような関係によって強められていきます（エフェソ 5：21 ～ 32）。

結婚という関係は神聖であり、神によって祝福されています（創世 1：27、28、2：24）。これはイエス・キリストによって確認されていますが（マタイ 19：4 ～ 6）、続く節のなかで、イエスは荒廃した世の中でこの理想が達成されないときでも、恵みが得られることを明確に認識し語っておられます。

救世軍人の結婚には思いと言葉と行いに対する絶対的な忠実さが求められます。すべての関係と同様に、忠実さ、誠実さ、信頼が必要不可欠です。しかし、この壊れて傷ついた世界では理想が常に達成されるとは限らず、結婚が必ずしもキリストの価値観を反映しているとは限りません。このことから私たちは恵みの重要性を認識する必要があります。人間関係の複雑さは、脅（おびや）かされたり傷つけられたりする結婚生活をもたらす可能性があります。解決が不可能な場合には離婚という結末を迎える可能性があります。このような時には習熟し思いやりのある牧会的ケアが必要不可欠となります。再婚は救世軍では許されています。可能な限り、徹底的かつ適切なカウンセリングの機会を提供する必要があります。このことを通して、深く傷ついた心が癒（いや）され、霊的にも感情的にも新しくされる助けとなるでしょう。

一部の文化では、結婚式は他の人々が集って祝われますが、結婚の決定は当事者である二人の個人の責任と選択であり、その家族や友人はその過程や二人のその後の生活にほとんど直接関与しません。一方、別の文化では核家族を超えた親族が結婚そのものの手配をすることがあり、結婚生活を家族と共に、伝統に基づいてしていくことが求められます。クリスチャンにとっては、このような状況やその他の事態にあっても、結婚が神からの贈り物であるという認識と、個人的な同意と互いを尊重することが損なわれてはなりません。

救世軍の「結婚の誓約」は救世軍人の結婚の基礎を概説しています。多くの場合、結婚式の最初に読み上げられ、信仰と献身という観点で結婚というものを定めています。

> 私たちは個人の幸福と自己実現のために結婚するのですが、私たちの結婚とその関係が、私たちの神への献身を深め、救世軍におけるイエス・キリストの兵士としての奉仕の効果を高めるものとなるよう、最善を尽くすことを、厳かに宣言します。
>
> 私たちは自分たちの家庭を、神が共に住んでくださることをすべての者が認める場所とすること、私たちの感化のもとにある人々に、福音の真理を教え、キリストを救い主として受け入れるよう奨励し、神への奉仕にその生涯を献（ささ）げるようにと支援する場所とすることを約束します。
>
> 私たちは神の助けにより、お互いに対して、真のクリスチャンの模範となり、喜びの時にも、困難な時にも、喪失の時にも、「わたしたちの主、救い主イエス・キリストの恵みと知識において、成長」するよう、お互いに励ます覚悟のあることを宣言します[※31]。

したがってクリスチャンの結婚は契約と召しであり、神の臨在の中で生き、神の目的によって形づくられる関係なのです。結婚は、個人、そしてカップルとして、造り上げられ、変えられていくための場となります。それはまた、他者の成長と育成の土台にもなり得るのです。

独身

結婚と家族生活の神聖さを守るという約束は、現在結婚している人、あるいは家族の中で重要な役割を担っている人のみが守るべきと考えられているかもしれませんが、そのような意図や意味ではありません。すべての救世軍人は独身、結婚しているにかかわらず、クリスチャンの原則に基づいて人生を送るよう召しを受けています。私たちは、神が結婚と独身の両方を用いて神の目的を果たし、私たちをキリストの似姿へと変えてくださるという真実を祝うことができます。

ユダヤ教が独身を神に受け入れられていないしるしと見なした背景に対して、イエスは、キリストの教会での結婚生活と同様に、独身生活が尊重され、等しく尊敬されるべきであると教えられました（マタイ 19：3～12）。パウロも独身について肯定的で、それに対する彼個人としての希望を表明しています。彼は、それぞれが神から与えられた賜物（たまもの）があると教えています。「神は、ある人には独身、ある人には結婚という賜物をお与えになっておられます」（コリント一 7：7　メッセージ訳聖書）。一部のクリスチャンにとって、独身は神によって選ばれた神への献げものです。神はご自身の目的を果たすために、また私たちを造りかえ、それぞれの可能性を最大限に引き出すために、結婚と独身の両方を用いられます。

家庭生活

クリスチャンは、子どもたちが神に愛されていることを知り、個人として成長していくための場所を家族が与えるべきであると信じています。クリスチャンの価値観と健全な相互関係は、家庭生活の一部として教えられ、形づくることができます。万国霊的生活委員会は、信仰と使命への献身を育（はぐく）む上での家族の役割をこ

※31『救世軍の儀式』第四章 結婚 26、27頁

のように強調しました。「私たちは、神とその働きに対して心を燃やしつつ、家庭を信仰継承の中心的なものとし、真実な愛によって子どもと共に成長するよう親たちを助ける方策を生み出し、子どもたちを健全に導くよう、世界中の救世軍人に呼びかけます[※32]。」

これがどのように起こるかは様々ですが、原則は変わりません。ある子どもは大家族の中で複数の人が子育てに関わる環境で育ちます。ある子どもは両親や兄弟姉妹とだけ生活し、育っていくかもしれません。子どもの幸福は常に最も重要です。いかなる状況でも、社会からの期待や伝統は、私たちのキリストへの献身と、すべての人間は神とその他の人たちとの関係によって満たされなければならないという神の願いに沿って、吟味（ぎんみ）される必要があります。

多くの文化では、家族は社会の性質と秩序の基盤となっています。中には習慣や期待などの違いはあるかもしれませんが、家族が自分の所属している場所の縮図となるのです。家族の中で、各個人は他の人々と一緒に暮らすのに必要な習慣を学びます。人生の初めと終わりにおいては、私たちを保護してくれる場所やものとなります。家族の中での経験はそれぞれ異なります。多くの人にとってそれは温かく、喜びがあり安全な場所ですが、ある人にとっては辛（つら）く、不幸せで、傷つけられる場所でもあります。後者の場合、救世軍の小隊はそのような人たちに、健康的で癒（いや）しの可能性のある空間を提供する必要があります。

結婚と家庭生活についての私たちの理解は、個人的な経験と私たちが生まれ育った文化によって影響されます。家族生活、独身、または結婚などで困難な道を通ったり、虐待を受けたりしてきた人々にとって、これらは辛い過去の記憶をよみがえらせてしまう可能性があるので、慎重な聞き取りと教育が必要になるかもしれません。

神の家族の一部として、すべての救世軍人それぞれのアイデンティティーはキリストに根ざしています。救世軍の小隊には様々な関係や家族のつながりをもつ人たちが集っています。人々を心から歓迎する小隊は、感情的な親密さ、安全、友

※32『救世軍教理ハンドブック』付録4．万国霊的生活委員会報告、救世軍人への呼びかけ 12、302頁

情などで、それぞれの人のニーズに応えようとします。会話や礼拝やプログラムにおいて結婚や家族について言うときに、結婚していない人を決して軽視してはいけません。むしろ、小隊での交わりにおける「家族」は、イエスによって教えられたように、すべてを包み込む神の家族ということに中心を置いているのです。

振り返りとディスカッションのために

- 何によって他の人との関係は良いものになりますか？　関係が悪化してしまうのにはどのような原因がありますか？
- 何によって結婚生活は良いものになりますか？　どのような態度や行動が結婚の関係を壊してしまうと思いますか？
- 「神様からの贈り物」として独身を生きることとはどういう意味ですか？（コリント一 7:7）
- あなたにとって望ましい家族生活とはどのようなものですか？

第8章

私は、
私に与えられた
時間・賜物・金銭・財産、
さらに
私の体と知性と霊性との
管理については
神に対して責任があると認め、
それらの忠実な管理者となる
ことを約束いたします。

この章の内容

- 私たちは、自分のもつ資源を管理し、使用する方法について、神に対して説明責任があります。
- 私たちには自分の所有物だけでなく、自分の命、生活、人生の管理者になる責任があります。それは、自分の存在と自分の持つものすべては神のものだからです。
- 私たちは神が創造されたこの世界を大切にし、それを守るように召されています。
- シンプルな生き方をすると、他者に惜しみなく与えることができるようになり、自分が持つものにさほど固執しなくなります。

救世軍兵士である私たちは、神との関係によって育まれる規律のあるライフスタイルを熱心に追い求めます。私たちは、自分たちがもつものは実際には自分たちのものではなく、神の栄光のために用いることができるように管理を託されているものであることをしっかりと認識して、管理者として自分の人生を生きるように奨励されています。管理者とは、他者のためにその財産、所有物、関心事の管理運営を託される者です。そして、良い管理者は、効率的、効果的、革新的、適正な手腕を用いて、その持ち主のために可能な限り最高の成果を達成します。

スチュワードシップ（管理者の責務）の原則に最初は当惑を感じる人もいるかもしれませんが、それは解放をもたらし、力を与える人生観です。それは、様々な文化に共通する貪欲の態度から、また、才能や技能、教育や所有物を評価することで人間の価値を判断する傾向から私たちを解放します。それは、私たちが自分に与えられた神からの賜物に気づくときに、感謝の精神で生きることを奨励し、他者の利益と被造物の保護のために、神の求めに応じてそれらの賜物を用いるべきであることを私たちに思い出させてくれます。これは私たちを利己的な生活への誘惑から解放し、自分の持っている物を他者と分かち合う、物惜しみしない心を励まし強めます。

新約聖書と旧約聖書の両方に、この原則に従って生きた人々の物語があります。ダビデ王はエルサレムに神殿を建てるための資材を集めるとき、国民に向けて、神が自分たちに与えてくださったことへの感謝として喜んで与えるようにと奨励しました。賛美の祈りの中でダビデ王は次のように語りました。「このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません」（歴代上 29：14）。新約聖書では、初代教会が財産を共有し、すべての人の必要が満たされるようにした、惜しみなく分け与える姿の中にスチュワードシップの精神が見られます（使徒 2:44、45、4:32 ～ 37、コリント二 8:1 ～ 15）。

所有権　誰の持ち物か

スチュワードシップとは何を意味するのかを考えるにあたり、まず、神は、私たちが持つものすべて、そして、私たちという存在すべての与え主であり、持ち主であるという真理から見ていきましょう。聖書はこれを明確にしています：

> 「地とそこに満ちるもの　世界とそこに住むものは、主のもの。」（詩編 24:1）

救世軍の教理は、神を「創造者、保持者、統治者」と断言しています。私たちの創造者として、神は被造物を私たちの取り扱いに委ねられました。創世記は、人間がスチュワードシップのために創造されたことを明らかにしています（創世 1：26 ～ 28、2：15）。神の管理者として私たちは、神が求めるように被造物を取り扱い（レビ 25：1 ～ 5）、私たちの世界を守り、この世界で喜び満ちあふれて生きるように召されています。同時に、私たちが神にかたどって創造されたということは、私たちがこの世界で賢明によく生きる能力をもっていることを意味します。私たちには、自分の命と所有物の管理者になる責任があります。

スチュワードシップ

スチュワードシップは、私たちがもっている資源をどのように管理し、使用するかを説明する一つの方法です。私たちには、私たちの資源、能力、機会を賢明に、そして神の栄光のために使う、という責任が与えられています。それは私たちの行いすべてを、今も世界で進行中の神の業に結びつけます。スチュワードシップを通じて、私たちは被造物を守り、造りかえ、再生する神の業において、神と共同して働くのです。

『救世軍教理ハンドブック』は次のように述べています。

> 私たちは、宇宙という原材料を自由に活用し、今とそして将来の世代のために、有効に用いることが許されています。しかし、その自由は、乱用されてはなりません。人口は増え、資源は減少していくという現状の中で、私たちに与えられている挑戦は、賢明に地球を取り扱うことです。
>
> この世界は、神を賛美し、御栄光を現すために造られました（詩編 19：1 ～ 7）。私たちは、神の目的に沿うよう管理しなければなりません[※33]。

私たちは、被造物の豊かな実りを維持するように生き、創造主なる神について被造物そのものが神を証ししていることを祝い称えるように召されています（創世

1 章)。

しかし、神に反抗する人間の性質により、私たちには与えられた賜物を悪用したり、それを自分たちの独占的な所有物として扱ったりする誘惑に駆られる可能性があります。創世記 1 章 28 節には、「支配せよ」という言葉が使用されていますが、これは「治めること」または「コントロールすること」を意味します。それが時に、地球の資源を枯渇させたり、他者を搾取したりするための言い訳として使われてきました。私たちは管理者としての自分の責任を無視し、神の目的に適うことなく、人間の欲望を満たすために被造物を利用してきました※34。

兵士として、私たちには環境の良き管理者になるという個人として、集団としての責任があります。すなわち、人間の益のために私たちがもつ資源を使用し、不必要な消費主義を避け、可能な限り資産を再利用及びリサイクルし、被造物を積極的に保護し、無駄にしないように努めるのです。

スチュワードシップは変革をもたらすもの

救いは私たちに、バランスを取り戻し、この世で善良で忠実な管理者として生きる機会をもたらします。イエス・キリストの死と復活によって可能となる個人の変革が、私たちがもつ資源に対する見方に違いを生じさせ、コミュニティーと世界の変革を可能にします。キリストにおける神の目的は、神、他者、地球と私たちの関係が刷新され、和解がもたらされ、癒しと、傷のない全き状態をすべての被造物にもたらすことです。

> 「神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」（コロサイ 1：19、20）

私たちが神を愛することにより、自分と他者との関係、自分と世界との関係を別

※ 33『救世軍教理ハンドブック』第 2 章 D. 2、33 頁
※ 34 救世軍国際的見解表明「環境への配慮」https：//www.salvationarmy.org/isjc/ips

の面から見ることができるようになります。

> 私たちと神の関係が深まるにつれ、神への愛は、他者への愛へと私たちを導き、その愛が、従順な弟子としての行動を引き起こします。……
> 　神の造られた世界と私たちの関係も変わります。その世界に私たちは、神の美しさとその輝きとを見いだし、神の創造の実を認めるのです。創造された世界に対する敵意は消え、私たちは、それらの管理人としての役割を理解するようになります※35。

管理者として、私たちは神の導きのもとで働き、与えられている賜物をどのように扱うかについて神に対して説明責任を負います。タラントンのたとえ話（マタイ 25：14 ～ 30）は、私たちの責任は私たちがもっているものを隠したり蓄えたりすることではなく、成長と繁栄につながるようにそれを用い、「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒 20：35）との御言葉を心に留めて、惜しみなく与えることである、と明確に示しています。

私たちの心構えを示すこの約束は、スチュワードシップが重要である領域を具体的にリストアップします。すなわち、私に与えられた時間と賜物、金銭、財産、私の体と知性と霊性です。

私たちの命（生活）

私たちの命（生活）、私たちの体、知性、霊性を献げることは、忠実なスチュワードシップの根底にあります。私たちが自分自身の良き管理者になることで、資源に対する姿勢が自分の中に自然に生じることになります。

私たちは、自分の霊的生活に関して何を選択するのか、神に対して説明責任を負います。その選択によって、私たちがより良く生きることになる場合もあれば、神との関係を軽視することにつながる場合もあるわけです。私たちは賢明な選択をすることで、これからの自分の人生の良き管理者になる可能性が高まります。

※ 35『救世軍教理ハンドブック』第 10 章 B.1、196 頁

神との関係の中に生きるその結果として、私たちは、自分の時間、賜物、スキル、知性は自分の権利ではなく、神の国のために用いられなければならない、つまり「管理されなければならない」恵みの賜物であることがわかり始めます。私たちは、神が創造された世界を慈しみ、尽くすように召されています。このことによって私たちの行うあらゆることに意味がもたらされます。

私たちは、自分の時間のすべては神からの賜物であると認めます。そうであれば、時間の使い方をどのように選ぶかは神に栄光を帰すものであるべきです。その一つとして、自分の責任と選択について慎重に検討し、時間を最も大切な事柄や、自分自身と他者の生活の質を高める事柄に当てるように努めることが挙げられます。

私たちはまた、どのように与えられた賜物や能力を伸ばすか、用いるかについて神に説明責任を負います。そして、自分たちが神の民の生活と地上における神の使命に貢献できる方法を追い求めるのです。コリントの信徒への手紙（コリント一 12 章）の中で、パウロは体の譬（たと）えを用いて、人々には様々な種類の賜物があり、それぞれが全体の調和の取れた健やかさに必要であることを教会に気づかせています。私たちは自分のスキルと賜物の良き管理者になることにより、それらを神の国のために賢く用いることになるのです。

自分の生活のスチュワードシップとは、自分の体をどのように扱うかを注意深く考えることでもあります。この世界を管理することにはセルフケア（自分自身の健康管理）も含まれ、私たちへの神の愛は私たちが自分自身を愛するようにと求めます。これは、自分のエネルギーを新たにして健康を維持するのに十分な休息とレクリエーションを取るように努め、状況が許す限り健康的に、そして必要な量だけ食事を摂（と）るということです。

しかし、時にはスチュワードシップの様々な要素の間で摩擦が生じ、それが難しい選択につながる場合があります。例えば、中には健康的な食事の費用を用意する余裕がない家庭があり、また、子どもの養育費を得るために長時間働かなければならない親がいるかもしれません。また、自分が働き過ぎで、疲れ切っているとわかっていても、他者や被造物のために役立っているのだから自分のしていることは正当化されるべきだと信じている人がいる場合があります。

私たちには自分の生活のスチュワードシップについて神に対する説明責任があり、その一つは、労働と休息という神の創造のリズムをいかに尊重し守るかということです。「役に立つ」からといって、無用な延々と続く働きを容認するのは正当化できることではありません。私たちは、最善の生き方を見つけるために、自分の生活に求められることを注意深く、祈り心をもって判断しなければなりません。

私たちの資源

私たちが自分のもつ資源をどのように用いるかについてよく考えることも、良きスチュワードシップのために求められることです。キリスト教は、自分の金銭と持ち物は神の賜物であると教えています。私たちが自分の持ち物に感謝して、それらを有効に使うことで、私たちは神に栄光を帰します。兵士である私たちのライフスタイルは、節度をもち、過剰になることを回避するのが特徴となるべきです。そうすれば、私たちがシンプルに生活することによって、私たちのサポートを必要とする人々に惜しみなく与えることができるのです。

このことの具体的な行動の一つに、私たちの収入の一部を神への献げ物として取り分けることがあります。私たちの収入または資源の十分の一を献げる「十分の一献金」の聖書の原則は、しばしばひとつのガイドラインとして用いられます。しかし、スチュワードシップの原則は、私たちが持つものはすべて神のものであると認識し、与えることを惜しまないようにと私たちを励まします。資源が不足している状況で十分の一を献げることは、神に栄光を帰する犠牲的な行為となります。一方で、十分の一を超えて与えることができ、それでもまだ自分のニーズを満たして余りある人々もいることでしょう。この場合、私たちの与える行為のガイドとなり、自分のもつ資源の用い方、分かち合い方を定めるのは、惜しみなく与えるという原則です（コリント二 9：5、6）。また、ある人々は「『十分である』原則」に従うでしょう。この場合には、その人は自分の個人的ニーズと家族のニーズについて、これで十分と思い決め、それを超えたものをすべて献げるのです。

私たちの個人的な状況がどうであれ、自分のスチュワードシップの一環として、克己週間募金など特別な献げものをすることに加えて、定期的な献げものを自分の小隊に欠かさず献げることはすべての兵士の責任です。状況によっては、現物の寄付、すなわち、収穫の一部や動物の子どもなどが神への献げ物として献

げられる場合もあります。

スチュワードシップの原則は、私たちが個人的な満足よりも神の目的に焦点を合わせて、規律あるライフスタイルを送ることを求めています。この原則は自分自身よりも他者の必要に目を向け、自分が持つものと自分自身を神に献げるようにと奨励しています。私たちが神とお互いに対して自分が何であるか、何を持っているかについて説明責任を果たすということは必ずしも簡単ではなく、厳しい要求だと感じるかもしれません[※36]。しかし、すべてが神のものであるという前提から始めるならば、「自分のもの」ー時間、賜物、技術、金銭、持ち物ーを手放しているのだとは感じません。そうではなく、本来神に属するものをお返ししているのです。考え方を変える必要があるかもしれませんが、それによって私たちは違う観点からこの世界を見ることができるようになるのです。私たちは、自分の持つものにさほど固執せず、日常生活の中で新しい意味を見いだし、自分と同様に管理者である他の人々とのつながりをつくり、与える行為の中に解放された喜びを見いだすことで、深みのある充実した生き方をするのです。

※36 『救世軍のガバナンスの土台（*Foundations of Governance for The Salvation Army*）』「救世軍のガバナンスの神学‘A Salvation Army Theology of Governance’」（邦訳未）https://issuu.com/isjc/docs/a_salvation_army_theology_of_govern 3-4、6-7

振り返りとディスカッションのために

- 地球の資源の持続に貢献できるように自分のライフスタイルをどう修正することができるか、その方法をいくつか書き留めましょう。
- 自分の時間、賜物、お金、持ち物、体、心、霊について時間をかけて十分に考えてみてください。気づいたことを書き留めましょう。あなたがしなければならないことは何ですか？
- 自分自身のケアのために必要なことについて振り返りましょう。何か変える必要がありますか？
- 今あなたがしている与える行為は、良きスチュワードシップを実践したことで生まれた成果でしょうか？　なぜそう思いますか？ または、なぜそうではないと思いますか？

第9章

私は、
アルコール性飲料、たばこ、
医薬用目的以外の
麻薬性薬品の使用、
ギャンブル、俗悪なポルノ関連
の事物、オカルト等、
体や霊性をそこなうすべての
ものから遠ざかることを
約束いたします。

この章の内容

- 神は、私たちの行いや習慣の中に、私たちの幸福を害するものがないよう望んでおられます。
- 私たちは、キリストが求めるように生きる自由を奪われることがないよう、気をつけなければなりません。
- 私たちは、自分の精神的、肉体的、社会的、知的、感情的な幸福を守ることについて、神に責任を負っています。
- 救世軍人は、依存症によって「奴隷」にされた人々のために正義を追求し、依存症がもたらす有害な影響に対して反対の声を上げます。
- この約束を守ることに特別な困難を覚える人々にも、憐れみと敬意をもって対応しなければいけません。
- 依存的な習慣を断つことで、充実した自由で誠実な人生を送ることができます。

この章であつかう約束は、神の賜物（命も含めた）の忠実な管理者であるために、自分自身や他者の幸福を傷つけ、破壊する可能性のある行いや習慣を避ける目的について焦点を当てています。もし、この約束を単なる禁止事項や規則のリストとして見ると、これらの要求は厳しく、また理屈に合わないように感じるかもしれませんが、健康と完全性を促進させる霊的な訓練として見ると、人生のあらゆる面で、忠実な管理人として召されているクリスチャン生活のガイドラインとなるのです。

霊的な自由とは

クリスチャン生活は、自由への道と言えるでしょう（ガラテヤ 5：1、13）。自由とは、神に造られた者として潜在能力を最大限に発揮する自由、神によって愛されていることを知り、神の愛への応答として他者を愛し仕えることで充実感を得る自由、他者との深い関係を育て築く自由を指します。この自由は、イエスとの関係の上に成り立っています（ローマ 1:1、フィリピ 1:1、コリント一 7:22）。イエスは代価を払って私たちを買い戻してくださり、その愛が他者を愛し仕える自由を提供してくれているのです。その自由は、自己満足や自己中心に許可を与えるものではなく、自分と他者の幸福のために責任をもって賢く用いられなければなりません。自由を守り、自分の行いや態度によって乱用したり失ったりすることのないように求められています。この約束は、クリスチャンの自由を損なったり、自由がもたらす豊かな生活を傷つけたり破壊したりするいくつかの可能性があることを認めているのです。従って、制約というより、キリストにある豊かな人生を妨げるようなものを捨て去ることを勧めているのです。

あなたをそこなう可能性のあるもの

「体や霊性をそこなうすべてのもの」とあります。キリストの僕としての自由と対照的に、誰かもしくは何かの奴隷になってしまうとき、私たちは自由を失い、キリストとの関係を危険にさらすことになります。救世軍人は、通常の行いや反応を変化させ、依存や中毒につながる可能性のある薬物や行いを受け入れたり使用したりしないことを選択します。この約束に記載されているすべての行い、薬物、その他の事柄は、依存を引き起こす性質があるので、あなたを奴隷とし、体や霊性をそこなってしまう可能性があります。初期の個人的な選択が、身体的、感情的、心理的な欲求や依存につながる可能性があります。これを無視したり、軽視したりしてはいけません。このようなことが起きると、依存的欲求によって、約束や関係性を無視したり、傷つけたり、破壊したりすることがあります。私たちが、キリストに仕える者として生きる自由を保つには、どのような薬物や行いにも依存してはいけません。これには、それ自体は有害でも違法でもない薬物が含まれることもありますが、その使用方法によっては不健康な欲求が生じ、依存的な習慣に陥ることがあるのです。

節制（自制）

私たちは、自身の身体的、社会的、知的、感情的な幸福を守る方法について、神に対して責任があります。私たちが神に似せて造られたことを知るなら、健康で健全な生活が大切であることを理解できます。聖書では、「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」（コロサイ 3：10）と命じています。節制は、心に内住する聖霊によって結ばれる、「霊の結ぶ実」の一つとして挙げられています（ガラテヤ 5：23）。同様に、ペトロの手紙二 1 章 5 ～ 7 節では、勤勉で実を結ぶクリスチャンになるために、「力を尽くして」私たちの人生に加えなければならない徳の中に自制を挙げています。私たちが節制（自制）するなら、クリスチャンとしての生き方に沿った選択をすることができます。私たちは、良い生き方を選択します―それは自分の行いや反応を管理して、自分や他者に害を及ぼす可能性のあるものと、繁栄し成長するためのものとを区別して選択することです。パウロの「テモテへの手紙」は、この思慮分別は自分で達成しなければならないものではなく、聖霊の賜物によることを思い出させてくれます（テモテ二 1：7）。しかし、私たちはその賜物を受け入れることを選択し、それが私たちの態度や行いを形成することを選択しなければなりません。

正義の追求

救世軍は、依存症の悪影響を受けている人々に対して長期的な取り組みをしています。依存的な習慣に反対することは、私たちの命を守るだけでなく他者のために正義を追求することになります。私たちは、アルコールや薬物の乱用、たばこ、ギャンブル、ポルノ、その他の依存的な習慣がもたらす悪影響に反対し、それらによって悪影響を受けている人々と連帯して声を上げます[※37]。 例えば、私た

ちがアルコールを摂取しないという選択をすることは、アルコールの依存による家庭内暴力の可能性や、飲酒運転による被害や人命の損失を認識しているということです。同様に、ポルノを見ないという選択は、他者を堕落させることを非難する行動であり、たばこを使用しないという選択は、使用者とその周囲の人々の健康に害を与えることを認識しているということです。

同時に、私たちは違った生き方のビジョンを提供し、健康、完全性、聖潔への献身を明らかにします。私たちは、「正義を行い、慈しみを愛し　へりくだって神と共に歩む」ようにという神の呼びかけ（ミカ 6：8）に応答して、依存症で苦しむ人々のために彼らと連帯して正義を求めます。

私は手を出しません

依存的な習慣を避けるライフスタイルを選ぶにあたって、道徳的な優越感をもってそれらを行わないように注意しなければなりません。私たちは、他のクリスチャンを含むすべての人が、私たちと同じ選択をするわけではないことを認識しています。多くの救世軍人は、家庭内や職場でアルコールやたばこの使用など、依存的な習慣に出合う可能性があります。このような場合には、裁いたり非難したりするのではなく、寄り添う心と誠実さをもって、寛大に対応するべきです。

文化によっては、ある種の依存的な習慣が顕著であることも、ないこともあります。例えば、イスラム教徒の多い社会では、アルコールの摂取量が少なくなる傾向があります。一方、一部の西洋文化においては、身体的な健康への危険性を考慮して、公共の場での喫煙が禁止されており、たばこを使用する人の数は大幅に減少しています。

また、アルコールを摂取したり、ギャンブルをしたりという行いそのものより、過剰摂取や依存的な習慣がダメージを与えることを認識しています。しかし、私たちは救世軍人としてこれらの行いを完全に断つことを選択します。一方、ポルノはいかなる状況においてもすべての人にとって害悪となります。また、クリスチャンの生活と相容れない、代替的霊性（訳注：オルタナティブ・スピリチュアリティ。伝統的なキリスト教の教義や実践にそぐわない概念や実行〔輪廻、占星術、タロットカード、瞑想、交霊術など〕を個人の興味に応じて取り入れるやり方で、しばしば宗教混交的である）を提供するオカルトの実践も同様です。

※ 37　救世軍国際的見解表明「アルコールと社会」。「ポルノグラフィ」（邦訳未）。https://www.salvationarmy.org/isjc/ips *Alcohol in Society ; Pornography*

ポルノは、インターネットに接続できる機器がほぼ世界中の人に行き渡ったことで、より簡単にアクセスできるため、広範囲にわたる害悪と言えるでしょう。このことは、年齢を問わず、携帯電子機器やコンピュータを持っている人は、誰でも利用できる可能性があり、子どもを含む弱者がそれらにさらされないように保護することがますます困難になっているということを意味しています。また、ポルノは、他の人と接触することなく、ダウンロードすることができます。これらの傾向は、以前の時代においてはポルノへのアクセスを躊躇していた人たちの障壁を取り除くものであることが懸念されています。

テクノロジーやインターネットや携帯電話の利用の可能性が増えたことで、他の形態の依存的習慣が浮き彫りになってきています。これらには、オンラインギャンブル、電子機器を使った強迫観念的なゲーム、ソーシャルメディアを常時チェックすることが挙げられます。これらはいずれも、別の目的のために使われるべき時間や資源を消費し、通常の人間関係から個人を孤立させてしまいます。過剰になると、全人的な生活に支障をきたし、心や精神が奴隷とされるのです。

同様に、「オカルト」という言葉が使用されるとき、クリスチャンの生活と相容れない代替的霊性が数多くあることを思い起こします。これらには、伝統的な信仰や慣習※38、あるいは現代社会に定着しつつある新しい霊性が含まれているかもしれません。ある文化圏においては、このようなものを聖書や神学、キリスト教共同体と組み合わせることで伝統的な型にはまらない個人的な霊性をつくり出せる、という危険な思い込みがあります。救世軍人として、クリスチャンの生活と一致しない宗教的信念や実践を容認しないことが重要です。

「兵士の誓約」のどの約束においても、ある人にとっては、この基準を実行したり、

※ 38　救世軍国際的見解表明「祖先崇拝」http://www.salvationarmy.org/ips *Ancestral Worship*

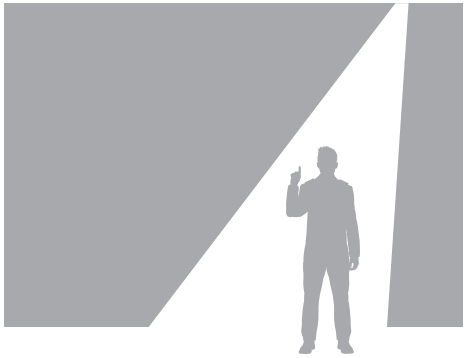
実践したりすることが難しい場合があります。このような場合には、それぞれが、支援、指導、説明責任のために、救世軍人のコミュニティーに頼ることが重要です。この約束をしっかり守ることに困難を覚える救世軍人は誰でも、恵みと憐れみによって取り扱われ、自分の歩みを取り戻すための援助が与えられることが期待できます。霊的な指導やサポートだけでなく、依存的な習慣と行いを断ち切るために必要な専門家の助けを求めるように勧める場合もあります。一部の人にとって、これは非常に困難な道であり、彼らが兵士としてとどまるためには、彼らの所属する組織に、忍耐と優しさと適切な説明責任が求められます。このような場合には、牧会ケア会議の思いやりのある説明責任と回復のための訓練が不可欠です。

第９の約束の意図は実際的かつ霊的なものです。救世軍の兵士は、身体と心と霊をそこなういかなる物質や活動の影響を受けることなく、キリストの弟子として生きることを選択します。これは、他の誰をも拘束しない救世軍人の約束ですが、私たちにとって重要です。同時に、私たちは依存的な習慣によって人生を傷つけられ、破壊された人々と連帯します。この約束は、私たちの霊的、身体的、社会的、知的、感情的な幸福に害を及ぼす可能性のある薬物や行いを思い起こさせ、健康と完全性に導かれるような生活の必要性を強調しているのです。このことは、律法主義や支配を目的としたものではなく、「兵士の誓約」を共有しない他の人々を裁くためのものでもありません。キリストに属する者として、完全に、自由に、誠実に生きるようにと召されている、救世軍人の誓約なのです。

振り返りとディスカッションのために

- あなたには依存的な習慣がありますか？　それに対してあなたはどのような行動をとりますか？　また誰に対して説明責任を負いますか？
- 過剰にならない限り社会的に受け入れられたり、寛大に取り扱われたりする「新しい」依存的な習慣について考えてみましょう。例えば、ビデオゲームや携帯電話などについてです。個人や社会に与えうる影響について話し合ってください。
- 依存的な習慣と戦っている人々を助けるために、あなたができる具体的なことは何ですか？
- あなたの社会において、代替的霊性はどのような面に影響を与えていると見ていますか？

第10章



私は、
神が救世軍をおこした
目的に忠実であること、
すなわち、
イエス・キリストの
福音を伝え、
人々をキリストに導き、
助けを要する人や弱い人に、
キリストの名により、
助けの手を伸べることを
約束いたします。

この章の内容

- 救世軍人としての私たちの召命は、常に宣教（せんきょう）することにあります。私たちは神の召しに応答し、自分の救いの経験を他者と分かち合います。
- 私たちは、自分が変えられること、弟子として生きること、お互いに責任を果たすことを通して、福音を伝えます。
- 福音を伝える方法は、文化や状況によって異なるかもしれません。
- 救世軍人は、救いの良い知らせを伝え、実践的な方法で隣人を愛するというミッションの総合的な性質を理解しています。

「兵士の誓約」のうち10、11、12の3つの約束は、私たちと救世軍の関係に焦点をあてています。それらは、兵士としての私たちのアイデンティティーを現していく上で、神の目的と、救世軍の主義と実践が重要であることを強調しています。公同のキリスト教会の一つとして救世軍は、「イエス・キリストの福音を宣べ伝え、主イエス・キリストの み名において、分けへだてなくすべての人々のニーズに応(こた)える」という神の使命に参画しています※39。

この約束には、神が救世軍を建てあげた3つの目的が挙げられています。これらは、この世界における、この世界に向かう、この世界のための神の使命に根ざしています。神の使命は、救世軍の使命です。

救世軍は「救われていない人々に対する不変の使命をもつ、キリスト教の一つの教派」です※40。イエス・キリストの生と死と復活を通して、神はその愛で私たちを神と和解させ、繁栄し成長できる関係を与えてくださいます。

救世軍の兵士として、私たちは信者の共同体に属し、交わり、癒(いや)しを経験し、弟子訓練を通して成長し、働き（ミニストリー）と使命のために備えられます。神の民の一員として生きるとき、私たちの生活はうるおい、霊的経験は深められ、クリスチャンの共同体の経験は拡大されていきます。私たちは共同体の中に集められ、そして宣教へと送り出されます。救世軍人としての私たちの召しは常に宣教にあります。私たちの目的は、私たちが経験した変革を他の人に証しすることです。

救世軍の教理第6条は「われらは、主イエス・キリストが、その苦難と死とによりて、全世界のために償罪(しょうざい)をしたもうたゆえに、何人でも欲する者は救われ得ることを信ず」（ヨハネ3：16、ローマ3：23、24）ということを私たちに思い起こさせます。イエスの和解と変革のメッセージは、人の生き方を変え、地域社会に新しい息吹と目的をもたらし、都市や国家に影響を与える力をもっています。罪赦(ゆる)され変えられた者として、私たちはそれを他の人に伝えるのです。

※39『救世軍年鑑2021（*The Salvation Army Year Book 2021*）』、万国ミッションステートメント（International Mission Statement, i）
※40『救世軍教理ハンドブック』付録5．表明の要旨3、310頁

救世軍という名前は、規律ある活動の必要性を連想させます。 救世軍の「軍」としての働きは、外の世界から自分自身を分離して兵舎にとどまることではなく、指揮官によって配備されたとき、すぐに世に向けて出て行けるように兵舎で準備していることです。救世軍の兵士として、クリスチャンの経験を重ねていくとき、私たちに神の和解の愛を分かち合う力が養われていきます。

イエス・キリストの福音（良い知らせ）を伝える

救世軍のメッセージは救いです。キリスト教の信仰の中心にあるのは、人類に対する尽きることのない神の愛です。神は、神の姿に似せて私たちを創造され、神との関係をつくってくださいました。この関係において、私たちは、私たちの人生と世のために備えておられる神のご計画に従う必要があります。 聖書は、神の似姿に創造された人間同士が互いに調和し、創造物と共存して生きていく様子を語っています。また、人間の不従順や反抗、神の愛に逆らって生きようとする姿も伝えています。しかし、神は人類をあきらめることなく、くりかえし救いと和解を与えてくださいました。

旧約聖書は、神がやがて来られ、救いの御業(みわざ)をなされ（イザヤ35：3、4、エレミヤ33：14～16）、人々の心の中に変革が与えられることを語っています（エレミヤ31：31～34）。新約聖書には、イエスがその預言をどのように成就したかが書かれています。イエスは神の国の到来と神の国の民として生きる手本を示してくださいました。イエスの死は私たちと神との間にあった隔たりの架(か)け橋となりました。また、イエスの復活はイエスを通してなされる私たちの究極的な神の救いの証明です。私たちが救われるためにくださった神の贈り物がイエス・キリストです。キリストによって私たちと神との関係が変わり、それによって私たち自身の見方が変わり、他の人との関係を形づくっていくようになります。聖書は、私たちは「新しく創造された者」であると言っています（コリント二5：17）。

これがイエス・キリストの福音です。私たちは、その体験をした救世軍人として、伝える自分のストーリーが他の人のストーリーとなるために、それを伝える責任があると確信しています。「私たちの使命は、神からの使命として、イエスの物語を語り、熱情をもってイエスが提供しておられる和解を伝えることです。私たちがそうすることによって、人々が、イエスの提供しておられる和解に、彼ら自身の

救いの根源を知るようになるのです※41。」神は、キリストを通して私たちをご自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務を私たちにお授(さず)けになりました。（コリント二 5：17 ～ 21）

人々をキリストに導く

イエスの福音は場所や世代を超えて語られます。それは聞いて良い話であるだけでなく、聞いた人の応答が求められ、神とのつながりを与えるものです。誰も無関心でいることはできません。私たちを変え、私たちの生き方に変革をもたらしてくださるイエスとの関係を、受け入れるか拒否するかのどちらかです。他の誰かのためにその選択をすることはできませんし、彼らが応答しなかった場合、それは私たちの責任ではありません。しかし私たちがイエスの良い知らせを伝えるとき、私たち自身の中に起きた変革を証しすることができるのです。

「人々をキリストに導く」というこの約束をするとき、人々の置かれている状況が、その生き方を左右する場合があることに注意する必要があります。国の文化や法律が異なる場合は、人々をキリストに導くための方法も変える必要があるでしょう。

ある地域では、私的または公共の場所で、私たちの信仰を分かち合う自由がありますが、しばしばそのような場所では他の宗教や哲学も同じように語られています。 それらの国々ではイエスの良い知らせを伝えることができますが、キリストだけを救い主、また主とすることを明確に表明しなければならないことを人々に納得させるのが困難な場合があります。彼らは信仰において非常に多くの選択肢があるので、一つの宗教に専心する必要はないと思い、また、生きるための指針として、いくつかの異なる哲学や宗教の一部分を取り入れるかもしれません。

また、他の文化では、私たちの信仰を公然と分かち合うことや、クリスチャンになるよう励ますことを禁じたり、制限する法律があるかもしれません。そのような所では、救世軍人は、生活や生き方を通して証しすることができます。私たちが家族、友人、職場の中で「兵士の誓約」のとおりに生きるとき、私たちの人間関係、ふるまいや受け答えで、クリスチャンとはどういう者であるかを表すことができるでしょう。私たちの生き方は人々にとって魅力的でわかりやすく、何が私たちをそのように突き動かすのかと質問してくるかもしれません。

※41『救世軍教理ハンドブック』第 4 章 E、85 頁

イエス・キリストのストーリーは「良い知らせ」です。自分だけのものにするのでは意味がありません。それは分かち合うものであって、どのように分かち合うかは、一人ひとりの能力、賜物(たまもの)、個性によって様々です。ある人たちには伝道の賜物があり、自然なかたちでイエスの良い知らせを伝え、イエスを主として受け入れる導きをします。しかし、もしそれが自分の賜物でないとしても、自分は何を信じ、なぜ信じるのかを説明し、自分の生活を通してイエスの弟子になるということはどういうことかを示す準備をしておく必要があります（ペトロ一 3：15、16）。

助けを要する人や弱い人に、キリストの名により、助けの手を伸べる

救世軍の創立当初、ウイリアム・ブースは個人の救いに焦点を当てました。しかし、救世軍が社会で最も貧しい人々への実践的な支援に取り組んだとき、神の贖(あがな)いの御業を見ることができました。聖書を通して、神の民は貧しい人々、社会から疎外された人々の世話をするように命じられてきました。これは旧約聖書の律法（レビ 25：35 ～ 38）、イエスの教えと癒しの働き（ルカ 4：18、19）、初代教会の行い（使徒 4:32 ～ 35）に見られることです。思いやりをもって救いの道に励むことは、私たちの救世軍人のアイデンティティーの一つとなっています。他者を愛していなければ神を愛しているとは言えません（マタイ 22：37 ～ 40）。その人たちも神の似姿に創造された人々で、神に愛され、イエス・キリストを通して救いが与えられています。ですから、私たちは彼らに尊敬、尊厳、希望を差し出すのです。私たちが弱い人々に助けの手を伸べるのは、神がそのように私たちを召してくださっているからであり、この世界で、ただ救いのみによって可能な全人的変革の実現を見たいと望んでいるからです。それは聖別会、救霊会（伝道集会）や野戦（野外集会）などの集会を開くのと同じように大切な働きです。

異なる文化や状況では、様々な異なった方法で伝道の働きがなされます。友人や隣人として、個人的に助ける場合もあれば、小隊のプログラムを通して支援の提供をする場合もあります。ある地域の救世軍には、社会福祉の働きがあり、実

用的、情緒的、霊的な専門的サービスの提供を継続的に行っています。どのような場面にも、私たちが仕える人々が変革の道を歩み、神が定めた人生を全うするためのきっかけがあるはずです。

時として「私たち」が「彼らの」問題に対する解決策をもっていると想定する誘惑があるかもしれませんが、必ずしもそうとは限りません。一人ひとりを尊重して接することが重要です。私たちは常に彼らにとって何が最善であるかを知っている、と思わないでください。彼らの状況が正しく把握（はあく）され、必要とするものを提供できているかを知るためには、彼らの話に耳を傾け、彼らと協力しなければならないのです。

また、兵士には状況によっては、社会の共同体や構造の影響で人々の必要が引き起こされているときに、正義を求めて社会に挑み、社会の構造を変えていくという機会があります。これもまた福音がなす変革の力です。それはイザヤの預言の成就（イザヤ 58：6）であり、イエスの教え（ルカ 4：18、19）の成就であり、世界の人々に対する神の御国（みくに）の証しです。

これらは、救世軍のある国々や地域すべてにあてはまるものではありません。特にキリスト教信仰が少数派である国では難しいでしょう。それらの場所では、困っている人々を助けるという賜物は、神の愛が動機づけの要因であり、世界の人々に対する証しとなります。そして誰一人その愛から除外されることはないのです。

神の使命は私たちの使命です。私たちは救いの経験を他の人に伝えることにより神の使命に参加し、それが個人、地域社会、そして世界に変革と癒しをもたらすことを信じています。

振り返りとディスカッションのために

- あなたが置かれている国や文化の中で宣教の召しをどのように遂行しますか？機会と課題のリストを挙げてください。
- あなたの能力、賜物、性格は、信仰を分かち合うことにどのような影響を与えると思いますか?
- 他の人々に信仰を伝える際に、どのような文化的、政治的課題に直面しますか？
- 信者の共同体として、私たちはどのようにして交わりを強め、弟子訓練を育（はぐく）んでいったらよいか話し合いましょう。
- イエス・キリストの生と死と復活が、自分自身や他の人々の中で、キリストとの和解とキリストとの親しい関係性の道をどのように開いていくかを考えてみましょう。

第11章

私は、
小隊での礼拝や
活動に積極的に参加すること、
また、
救世軍の使命と
全世界的な働きを支え、
拡張するため、
献身的かつ犠牲的に
献げものをすることを
約束いたします。

この章の内容

- 救世軍人は、自分たちの召しや賜物、技能や能力に応じて、すべてのメンバーが果たすべき使命と働きがあるとする万人祭司の教理を信じます。
- 救世軍人は、救世軍において、また救世軍を通して、使命に生きる生涯を歩むように招かれています。私たちは与えられているものをよく管理し、分かち合っていくことが求められています。
- 兵士と士官は、救世軍の信仰、使命及び奉仕に対する共通の責任をもっています。
- 私たちは兵士として、世界中の救世軍人に対して親しみをもち、互いに支え合い、お互いから学び合い、可能である時は、共に礼拝し、仕え合い、共に祈ります。

救世軍は、すべての兵士が総動員されることを約束します。兵士は救世軍のすべてのことにおいて参加することが期待されます。私たちは、救世軍を通して表される神の使命に積極的に関わっていくために自身を献げます。すべての救世軍人が同じようにできるわけではありません。どのように関わっていくかは、それぞれの個人の状況やそれぞれの文化的背景に合わせた救世軍のスタイルによって変わっていきます。

これは決して、兵士だけが小隊に関するあらゆることに関わることができるということではありません。多くの軍国では、あえて兵士にならないという選択をした人々や、または状況が許さないために兵士にならない人々が、救世軍で礼拝を献げています。彼らは交わりから排除されるべきではなく、義務感や当然だという期待からではなく、できる限り貢献する機会が与えられるべきです。それとは対照的に、兵士として誓約した人々は、積極的に関わっていくように招かれ、期待されています。

万人祭司

私たちが兵士として活動に参加していくことは、小隊の一部としてであり、一人ではできないことです。私たちの信仰は、信仰の共同体の中にあって最もよく表され、育まれます。また人々を救い、人生を変えるキリストの愛を世界に証しすることも、信仰の共同体の一部としてなすことです。

救世軍人は、万人祭司の教理に属していると信じます。これは、すべてのクリスチャンはキリストを通して神に近づくことができると信じていることを意味します（テモテ一 2：5）。また、教会はその全体として「王の系統を引く祭司」（ペトロ一 2：9）であること、つまり「一人ひとりの信者には、果たすべき使命と働きがある※42」ということを私たちに思い出させます。このことは、すべての小隊のどんな兵士にとっても真実です。それは、誰でも何でもすることができるとか、どんな役割でも担うことができるということではなく、すべての兵士は、共同体に対してそれぞれがどのような貢献をすることができるか見分けるべきであるということです。私たちはそれぞれが提供し、用いられる、異なる賜物、技能及び能力をもっていて、私たちが共に働くとき、一人ひとりがいかに大切であるかを知り、信者が神の民として共に働くときに見ることができる、計り知れない多様性と豊かさを認めることができます（ローマ 12：3～8）。救世軍の兵士として、私たちは誓約を共に分かち合う他の人々と一緒に仕えることで、深い帰属意識と連帯感を経験します。私たちが使命に携わっていくことは、私たちの人生を豊かにする充足感と喜びをもたらし、私たちが共に礼拝を献げることで、私たちが霊によって、お互いにつながり、神につながっていることがわかるのです。

※42『救世軍教理ハンドブック』第10章 継続的な学びのために C.5、211頁

小隊活動、礼拝、証言

「私は、小隊での礼拝や活動に積極的に参加すること……を約束いたします。」すべての兵士は救世軍のいずれか一つの小隊に兵士として入隊します。私たちの名前は、「兵士の誓約」に示された基準に従って生きていくということを公に宣言することによって、兵士名簿に登録されます。兵士として、私たちは権威の下にあることを認めます。最終的にこれは神の権威であり、同時に軍隊である以上、共通の目的を達成するために、士官や下士官の指示のもと、共に働くということに全力を注ぎます。

兵士として、私たちは人生の上に神の召命を受け入れました。私たちは信仰に専心し、いつまでも続く、人として成長していくことに力を注ぎ、救世軍の使命と奉仕に全力を注ぎます。ある兵士たちは下士官になり、地元の救世軍の小隊において責任ある立場を受け入れた霊的指導者として、彼らの時間、賜物、能力を共同体に献げ、牧会的ケアを提供し、小隊の戦略を練り、礼拝を献げ、証言をし、財政を管理し、将来の方向性を定めます。もし私たちが指導者としての責任をもつならば、私たちは常に神の使命の目的に目を留めていなくてはいけません。

救世軍人は、小隊の公のプログラム以外にも、伝道と使命の機会を求めていく責任があります。「兵士の誓約」に対する私たちの献身は、私たちが生きる生き方、また私たちの人生のすべての面でなす決断において見られなければなりません。私たちには家族や友人、職場の同僚や私たちの余暇の時間を共に過ごす人々など多くの人間関係があります。私たちはいつでもキリストの、人を造りかえる力

を知っている者として、また神の国の価値観に沿って真摯に生きようとする者として生きるべきです。それは私たちがいつでも模範的なクリスチャンでいるということや、道徳的に優れている者になるという意味ではなく、単純に私たちがなした約束を一貫して守る生き方を選ぶ、ということを意味します。兵士としての私たちの人生は、聖い生活から流れ出る内なる高潔さと自己鍛錬を常に映し出しているべきであり、私たちの決断や選択が、キリストにあって私たちが何者であるかを映し出しています。私たちは、それぞれの状況に合った方法で福音を分かち合い、私たちが経験した変革はすべての人々にとって関係があり、力強いと信じて、キリストにある信仰を証ししていくべきです。

使命を遂行するために、他の人々が彼らの能力や賜物を用いて有給の仕事に就いて働きを支える一方、ある兵士たちは救世軍に雇用され、救世軍で働くことを通して、それぞれの場所において使命と働きの召しに応答しています。

他の兵士たちは、救世軍の士官となるように神から召しの声をかけられます。そして神に従うことによって、彼らは地元の小隊やこの世の仕事から離れ、救世軍士官として任官され、任命されることへと導かれます。彼らの召命は、士官としての働きに備えるための学びと訓練を通して、試され、確かなものとされます。このようにして、彼らは神の使命のために、指導者たちによって任命を受けることができる状態になります。士官になるということは、この召命に対する従順が求められます。士官になるということは、神から召しを受けていることを知り、そして救世軍によってその召命が確かにされた人々に、機会と充足感を与えます。

礼拝において私たちは、神に帰すべき誉れを神に献げます。神の民として私たちは神の尊厳とすばらしさをほめ称え、キリストを通して与えられた私たちの救いに感謝を献げます。私たちが神についてわかっていることは、私たちが私たち自身の人間性についてわかっていることの範囲でしか知り得ません。私たちは聖潔において成長する必要があり、聖潔を生きる必要があるということを、私たちの神との関係においてのみ見いだすことができると気づきます。礼拝を通して、私たちは強められ、保たれ、神が私たちに望んでおられるような者となるようにチャレンジを受けます。礼拝は私たちを、活発で実践的な兵士として整えてくれます※43。

※43 本書 第3章参照

「兵士の誓約」にかつて用いられた「軍中の約束」という名称は、兵士になるということの性質を明確に示しています。救いの軍隊という、軍隊流の比喩で描写しているように、兵士は「戦い」に参加することが求められます。悪魔と戦っている軍隊というイメージが、それは個人的にも共同体にも影響を与えていますが、私たちの自己認識の中心にくるものです。最も重要な掟とは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」第二の掟は、「隣人を自分のように愛しなさい」（マルコ 12：30、31）であるとイエスは教えられました。神を愛し、私たちの隣人を愛することは、神のかたちに造られた人（創世 1：26、27）としての価値を認めない態度や行いによって、人々をないがしろに扱う個人や構造に対して、戦う動機となります。救世軍の兵士として、私たちはすべての人に正義が行われるよう求めることに力を注ぎます。

神を愛し、私たちの隣人を愛することは、すべての人が神の愛を受け入れることで変えられるという権利をもっていることを私たちに思い起こさせます。救世軍の教理第6条は、「何人でも欲する者は救われ得ること」を宣言しています。兵士になることは、私たちがこの真実を人々に分かち合うという責任があることを私たちに思い起こさせます。私たちは私たちが経験したことを証しするのです。兵士として、私たちは私たちの証言を人々に伝える責任があります。

救世軍の制服や、救世軍のロゴが入った服を着ることは、私たちの誓約を思い起こさせる大切なものであり、また、私たちが何者であるかの印、私たちの人生の内にキリストがおられることの証言となります。それらは、小隊、また更に幅広い救世軍人の共同体に連なっていることの印ともなっています。制服は、私たちが住む地域において、私たちがクリスチャンであることを目に見える形で示してくれます。多くの場合において、制服はまだクリスチャンでない人々に、私たちが何者であるか、なぜ私たちが制服を着るのか説明することによって証しをする機会をも与えてくれます。ある状況においては、兵士が制服を着ることなく、彼らの誓約に全く献身し、兵士として積極的に働きに参加していくこともあります。

惜しみなく献げる

活兵士は救世軍の働きのために惜しみなく献げることを選びます。その目的、実践、主義において献身している者として、私たちは軍隊が持続し、成長するため

の財源があるということを確かにする責任があります。救世軍の働きのすべての面に貢献できる兵士はいませんが、しかしすべての兵士は、自分たちが与えられているもの、持っているものに応じて献げることができます。

私たちは、神から与えられているものへの感謝として、救世軍に献げます。このことは私たちが持っているものを惜しみなく自由に献げる動機となり、私たちの地元の小隊をサポートし、また同時に世界的な救世軍の働きやプロジェクトを支援する機会を捉えることになります※44。これは、ただ有り余る中から献げる人々にとっての機会になるだけでなく、すべての兵士にとって、自分たちが持っているものの中から分かち合うという有意義な方法となります。兵士はまた、救世軍の礼拝や証言が盛んなものとなるために、彼らの賜物、技能や能力を必要に応じて提供するのです。

救世軍の全世界的な働き

ほとんどの救世軍兵士にとって、実際の活動はそれぞれの小隊、連隊、軍国で行われます。しかし同時に、私たちは万国的な救世軍ということを意識し、何らかの方法でサポートをすべきです。私たちは兵士として、世界中の救世軍人に対して親近感を覚えます。私たちは異なる国に住み、全く異なった生活スタイルをもち、異なった方法で必要を満たしますし、礼拝は異なって見え、異なって聞こえます。それにもかかわらず、私たちは救世軍において兵士として共通の献身をしており、これは私たちの違いを超えて、私たちを一つにします。私たちはお互いを、それぞれの場所において、救世軍で積極的に働き、礼拝し、証しする、キリストにある兄弟、姉妹と認めます。私たちは互いに支え合い、お互いから学び合い、可能である時には、共に礼拝を献げ、共に仕え、共に祈る機会をつくり、また機会を捉えます。

私にできる限り

この約束の英文中には、「私にできる限り」（“as I am able”）という大切な言葉が入っています。私たちが救世軍の兵士になるとき、私たちは証言と奉仕のための多くの機会を有する、世界的な信仰者の交わりに連なります。証言や奉仕の仕方は私たちが世界のどこに住んでいるかということと、私たちの小隊の働きがどのようなものであるかによって違ってきます。しかし、同時に、私たちはそれぞれ、神と救世軍に私たちのすべてを献げる唯一の存在であることを認めるのです。私たちが「積極的に参加する」方法は、おそらく他の人々のそれとは異なっているでしょう。私たちに共通して求められる唯一の基準は、神がなれと望まれる姿になり、神が求めておられるものを献げていこう、という私たちの決心なのです。私たちがこの理想に到達しようともがき、理想の姿になれないとき、私たちを助け、導くことができる士官、下士官や成熟したクリスチャンの支えや励ましに頼ることができるようにすべきです。

この11番目の約束は、救世軍で、また救世軍を通して表される神の使命に、私たちにできる限りのことを向けさせます。私たちは神に献げられ、神聖な目的のために献身しているので、働き、礼拝を献げ、証しすることを選ぶのです。神に服従することによって、私たちは神に忠誠を誓い、すべてを明け渡し、またそれゆえ神の子となる資格を与えられた者（ヨハネ 1：12）として、充足感と喜びを見いだします。

振り返りとディスカッションのために

- あなたはどのような働きに召されていると思いますか？　神の使命を果たすため、神への献身をどのように表しますか？
- 兵士として、軍隊流の信条に関する異なる視点をどのようにまとめることができるか話し合ってください。また、兵士になるという概念の意義について話し合ってください。
- 個人として、また信仰の共同体の一員として、どのようにあなたは使命のためにあなたのもっている資源を扱いますか？
- 全世界的な救世軍において、神に仕えるためにどのように私たちの一致と多様性を育むことができますか？

※44 本書 第8章参照

第12章

私は、
救世軍の主義と
活動とに
真実を尽くし、
指導者に従うことを
約束いたします。
また、
時が良くても悪くても、
救世軍の精神を
公に示すことを
約束いたします。

この章の内容

- 兵士であることは、キリストに従う弟子としての私たちのあり方を示す手引きです。
- 神が望まれる者になるための信仰の旅路において、この誓約で示された基準を達成しようとして困難を覚え、失敗することがあるかもしれません。そのような時に、信仰の共同体は神と他の人々との関係の修復を助けるよう召されています。
- 救世軍人として、私たちは個人、また共同体としての聖潔（きよめ）について、相互の説明責任があります。これらは献身、忠誠、託された権威を受け入れることを通して表されるべきものです。
- 救世軍兵士であることは特権であり喜びですが、安易で楽なものではありません。救世軍人が互いに支え合い、神からの勇気と知恵を用いるように召される時があることでしょう。

兵士になるということは、単に救世軍人の仲間に入るという以上のものです。小隊の中で活動の場を得ること以上のものです。兵士であることはキリストに従う弟子として召された者の在り方を示します。私たちが「兵士の誓約」に示された基本に従い忠実に生きる時、誓約に示された主義と実際の働きとが一つになって、全体に共通するアイデンティティーとなります。

救世軍の主義と活動とに真実を尽くす

すべての軍国において、一人ひとりの兵士が「兵士の誓約」をします。しばしば環境と文化の違いは実践としての行動の違いを意味しますが、常に、どこにおいても私たちの活動は、私たちが共に分かち合い、兵士としてなした誓約の信仰と一貫性がなければなりません。私たちは「私は、……約束いたします」と言いました。これは、キリストを主として受け入れた者として献身の生き方をする、との意志を意味します。

「兵士の誓約」は献身の大切な面を次のようにまとめています。

- 私たちは救世軍教理に真理が表されており、それがイエスの弟子としての私たちの人生を形づくることを信じます。
- 私たちは聖霊の導きに心を開き、神の国の価値観に基づく尊厳をもって生きることを目指します。
- 最も親密なものを含む私たちの関係において、私たちの態度や行動はキリストへの献身によって形づくられます。
- 私たちは与えられている資源を、神の国のために賢明に惜しみなく用いることを目指します。
- 私たちは依存性のあるものを避けます。
- 救世軍兵士として私たちはこの世界における、この世界に向かう、この世界のための神の使命に焦点を合わせます。
- 私たちはイエス・キリストの証人であり、すべての人に尊敬と愛をもって接し、貧しく疎外された人々のために正義を求めます。
- 私たちは兵士として、救世軍人の共同体においても、まだクリスチャンでない人々への働きかけにおいても、積極的に活動に参加します。

これらの基本は私たちの行動を導きます。救世軍において公になすことも、個人的に行うことも、私たちの宣言と一貫性がなければなりません。

献身への挑戦

この献身ということは挑戦であり、非常に困難なことのように思えます。すべての小隊には新しい兵士を支え導いてくれる指導者や成熟した救世軍人がいるでしょう。すべてのクリスチャンは神が求められる姿になる過程の中にあります。これは全生涯にわたる旅路です。パウロはフィリピの人々にこう書きました。

> わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。あなたがたの中で善い業（わざ）を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。（フィリピ１：３～６）

これは救世軍兵士にとっても同様に真理です。私たちは、神がその中で「善い業」を始められた人々と福音において共に働くものですが、まだ完全ではありません。この主の弟子となる誓約、あるいは関係や行動における誓約の基準に達するために苦しんだり、失敗する時があるかもしれません。そのようなことが起こったときに、兵士であることが無効になったとか破綻（はたん）したと考える必要はありません。むしろそれはしばしば他の人に助けられて、将来同じような困難を避ける助けとなる、先に進む道を考えるよう導きます。これが実際どのように起こるかは、環境、性質、起こったことの重大さによります。

いかなる時も私たちは、この誓約が神と共にあることを覚える必要があります。ですから、まず私たちがすべきことは、神との関係を修復することです。これは他の人との和解を求めることに導かれるかもしれませんし、昔行ったことを正さなければならないかもしれません。それと同時に救世軍に対しての献身を覚え、救世軍の指導と規律を受け入れる必要があります。士官や下士官また牧会ケア会議は私たちを支え、助けることができます※45。彼らは霊的、実際的な相談に乗

※45『軍令及び軍律　牧会ケア会議の巻』

ると同時に適切な対応を取ります。どんな時にも彼らは敬意と同情と個人に対する関心をもって行動すべきです。

指導者に従うこと

共通のアイデンティティーをもつ者として、私たちにはまず神に対する説明責任がありますが、それと共に指導者に対して、お互いに対しての責任があります※46。私たちは兵士としての生き方を分かち合います。これは私たちの活動における説明責任を担う指導者に従うことを含みます※47。彼らもまた兵士ですが、士官という立場のゆえにその権威を与えられています。彼らは他の兵士と異なった、より高い階級というものではなく、その任命によって、救世軍の中で仕える指導者としての役割に基づいて権威を与えられるのです。彼らは個人的にキリストの弟子であること、人々への指導、戦略と実践において説明責任を担います。

指導者への忠誠がどのように表されるかは、多様な文化、指導の形態によっておそらく違うでしょう。救世軍兵士はこれらの違いを当然尊重したうえで、指導者に従う必要があります。しかしながら、いかなる兵士も、祈り、考えた上で「兵士の誓約」に表された価値観に反するような命令に盲目的に従うことは求められません。彼らには懸念を述べたり、決定に対する合理的な質問をする機会が敬意をもって与えられるべきです。これで確信がもてなければさらに助言を求める必要があります。『軍令及び軍律　牧会ケア会議の巻』は有益な導きを提供するでしょう。

救世軍の精神

救世軍は東ロンドンの貧しい人々への働きとして始まりました。歴史を通じてこの使命は受け継がれています。救世軍は、人が神のかたちに創造されたにもかかわらず、人間として創造主に反逆する傾向があることを信じます。いつでもどこでもイエス・キリストの生と死と復活は、この私たちの反逆によって壊れてしまった神との関係を修復する道を示します。この贖（あがな）いは、個人を、コミュニティーを変革する可能性をもち、やがてすべての被造物が神と和解する時のしるしなのです（コロサイ 1：20）。

この真理を新しい世代に語ろうとするならば、方法をそれに適したものに変える必要があることを、私たちはウイリアム・ブース、カサリン・ブースという創立者から学びました。違う文化と交流をもつためには違う方法が必要でしょう。しかし、本質的なメッセージは変わらず、私たちの土台、私たちの使命の基礎を形づくります。

同時に私たちは自分自身をキリストの弟子として献（ささ）げています。福音のメッセージと一緒に、個人的また共同体としての聖潔への招きがあります。救いを受け入れて、私たちは信仰に成長し、なり得るべき人に変わるよう招かれます。私たちは神の聖（きよ）さを映して、聖くなるよう招かれています（ペトロ一 1：16）。また、お互いに対して責任をもつように、キリストの弟子として、励まし合い、支え合い、挑戦し、適切に戒め、常に憐れみと恵みをもつように招かれています。士官と下士官は、兵士たちがキリストの弟子として成長し、働きに参加する機会を確実に得るために、特別な責任をもっていますが、究極的にはすべての兵士はそれぞれの神との関係に対して責任をもっています※48。

時が良くても悪くても

救世軍兵士であることは特権であり喜びです。個人的な充実とキリストとのより深い関係に導くものです。救世軍で分かち合われる交わりは成長を励まし、働きの機会を与えます。多くの所で救世軍の働きは奨励され、支援されています。そして、救世軍兵士はキリスト教界と社会において敬意を払われています。疎外（そがい）された人々に対する救世軍の働きは知られており、喜ばれています。

同時に、兵士であることは常に容易で心地（ここち）良いものではありません。ある人にとっては兵士となることは家族の中で、友人関係の中で、働く仲間の間で個人的な

※46 *Servants Together ― Salvationist Perspectives on Ministry*（邦訳未）, Salvation Books, IHQ, 2008

※47 ヘブライ人への手紙 13 章 17 節。救世軍国際的見解表明「権力の運用」（邦訳未）www.salvationarmy.org/isjc/ips *The Use of Power* も参照

※48『ジャーニー・オブ・リニューアル』第 3 章 ミッションに関する説明責任の枠組み

戦いをもたらすでしょう。それは痛みや失望になり得るものです。救世軍人の仲間による支えは力になります（ガラテヤ 6：2）。

私たちはまた、イエスのメッセージが、ある人々や文化においては歓迎されず、積極的に否定されたり、攻撃されることもあることを知っています。そのようなときに、それが個人からであっても社会からであっても、兵士であることには勇気と粘り強さと知恵が必要です。イエスは弟子たちに言われました。「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」（ヨハネ 16：33） 兵士として緊張と苦しみを経験するかもしれませんが、神の恵みと力はどのような状況でも十分であることを知って確信をもつことができるのです（コリント二 12：9）。

「兵士の誓約」は下の宣言の言葉で終わります。兵士となるよう強く求める理由は、キリストの愛への私たちの応答であることを示します。私たちの神への誓約と救世軍における献身、活動的な教派の「兵士の誓約」への署名はここから来るものです。すなわち、「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」（ヨハネ一 4：19）

> **私は、私の救いのために死に、そして今生きておられるキリストの愛が私に迫り、生涯を全世界の救いのために献げるよう求めていることを確信し、今ここに、私の自由意志によって「兵士の誓約」に記名調印し誓約するにあたり、列席のすべての方々が証人となるよう求めます。そして、私は、神の助けによって、救世軍のまことの兵士であるとの十分な決意をここに宣言いたします。**

振り返りとディスカッションのために

- 「兵士の誓約」のどの部分が、最も実行が難しいと感じますか。
- 「兵士の誓約」を守ることができず、しかし回復を求めている人を、信仰の共同体はどのように助けることができるでしょうか。
- 指導者は完全ではなく、ある時には失望することもあるかもしれません。そのような状況のときに、あなたはどのように忠誠と敬意を表しますか。
- 兵士として何らかの迫害を受けたり、不興を買った経験がありますか。どのようにしてその経験を乗り越えたかを語ってください。
- 救世軍兵士であるということが何を意味するかを考えてみましょう。その特権と責任は何でしょうか。約束したことを守るために何を確認すればよいでしょうか。書き出してみて 6 カ月後に、そして毎年、振り返ってみましょう。

召されて兵士となる

「兵士の誓約」を探求する

救世軍軍令及び軍律　兵士の巻

2022 年 10 月　初版第一刷　発行

非　売　品

著　者　救　世　軍　万　国　本　営

発行者　スティーブン・モーリス

発行所　救　　世　　軍　　本　　営

〒 101 - 0051 東京都千代田区神田神保町 2 - 17

TEL 03 ― 3237 ― 0881

© 救世軍本営 2022　Printed in Japan